

専門基礎分野 人体の構造と機能

科目名		単位数	開講期
解剖生理学Ⅵ		1 単位 15 時間	1 年次後期
<p><目 的> これまでに学んだ、生活機能別の解剖生理を統合して、生活行動としての現れ方を理解することで、健康状態に合わせた回復への支援と日々の生活を安楽にするための基礎的能力を養う。</p> <p><目 標> 1. 生活行動をとおして、生物体と生活体の統一体としての人間を理解する 2. 正常な人間の機能・構造について理解する 3. 自己の健康な身体と日常生活に関心が持てる 4. 生活過程を整える上で要となる“いのちを守り”“日々の生活を安楽する”“その人を尊重する”の看護の視点と関連づけることができる</p>			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 生活行動をとおして、統一体としての人間を理解する	15	<p>[学習の視点] 解剖生理学Ⅰ～Ⅴを総合し、自己の健康な体と生活行動を結び付けて学ぶ。</p> <p>[学習課題] 1. 外部環境とからだ 人類誕生時の環境と今 2. 外部情報調整と内部情報調整 3. 息をする、 4. 物質の流通 循環 5. 食べる 6. トイレに行く 7. 動く 8. 眠る 9. 話す、聞く 10. 私たちの体はどうやって病原体をやっつけるのか？ 11. 「日常生活行動からみるからだ」をテーマとし、自分たちが興味のある生活行動について解剖生理学をもとにメカニズムを考えてみる。</p> <p>[学習の進め方] 1. 講義・体験学習・グループワーク 2. 学びと課題の提出</p>	浅野 智子 (実務経験教員)
評 価	課題・学びの提出 (50%) 筆記試験 (50%)		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・系統看護学講座 専門基礎分野 人体の構造と機能〔1〕解剖生理学 坂井 建雄 他 (医学書院) ・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社) ・看護のための疾病論「ナースが視る病気」薄井 坦子 (講談社) ・フローレンス・ナイチンゲール「看護覚え書」改訳第7版 (現代社) 		
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・形態機能学 生活行動からみるからだ 第4版 菱沼 典子 (日本看護協会出版会) ・携帯機能学ワークブック体験してか考えるからだのいとなみ 菱沼 典子 (日本看護協会出版会) 		

専門基礎分野 疾病の成り立ちと回復の促進

科目名	単位数	開講期	
臨床薬理学	1 単位 15 時間	2 年次前期	
<p>< 設定理由 ></p> <p>対象の健康な生活を支援する立場にある看護師は、医師の指示のもとに薬物を取り扱う機会が非常に多い。そのため、対象の健康状態と治療法を関連させて理解し、安全かつ適正に与薬する知識と技術が必要となる。また、看護師には、薬物療法の評価や有害作用の早期発見と適切な対応が求められている。さらに、対象の健康の段階に応じた服薬指導が、医療チームで連携・協働して行えることが期待されている。</p> <p>そこで、『基礎薬理学』で学習した薬物一般の基礎知識と、基礎看護学で学習した与薬の方法を土台にする。そして、対象の疾患・症状に応じて、治療のために薬物がどのような理由で用いられ、どのように作用（薬物動態）し評価されるのかを、事例をとおして学習する。さらに、与薬は医師や薬剤師・看護師との連携・協働の中で行われていることを学習し、臨床実践を意識できるものとする。</p> <p>< 目的 ></p> <p>臨床実践に近い状態で与薬の一連のプロセスを、対象の疾患・症状に応じて、安全で適正に薬物を使用できる知識と考え方を養う。また、これらの学習をとおして、薬物療法における医療チームの一員としての看護師の責任と役割について理解を深める。</p> <p>< 目標 ></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 与薬の実際で必要となる知識を理解する 2. 事例をもとに対象の疾患・症状に合わせた与薬の実際を理解する 3. 薬物療法における医療チームの一員としての看護師の責任と役割について理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 与薬の実際で必要となる知識	4	<ol style="list-style-type: none"> 1. 医薬品の取り扱い <ol style="list-style-type: none"> 1) 医薬品の基礎知識 <ol style="list-style-type: none"> (1) 医薬品の剤型 (2) 医薬品の規格（含量・単位） (3) 医薬品の用法 2) 医薬品の処方と調剤 3) 医薬品の適正使用と情報の活用 <ol style="list-style-type: none"> (1) 適正使用と確認すべき事項（緊急安全情報・安全性速報） 2. 薬物治療の実際で必要となる知識 <ol style="list-style-type: none"> 1) 患者と薬物療法 2) 薬物療法の評価 3) 安全管理 4) チーム医療と薬物治療 <ol style="list-style-type: none"> (1) 医師、薬剤師、看護師の責任と役割 (2) 薬物療法における医療チームの連携・協働 3. 服薬指導 	今島 昌三
2. 症状・疾患に合わせた与薬の基礎知識（事	6	1. 事例 1・2 の処方例をもとに、対象の症状や疾患特有の 1)～8) について、基礎となる知識を学習する。	

例)		<p>1) 治療方針 2) 治療薬 3) 薬物動態 4) 有害作用 5) 与薬 6) 薬物療法の評価 7) 医療チームの連携・協働 8) 服薬指導など 事例1：主要疾患の治療薬を使用のケース (1) 高血圧症－カルシウム拮抗薬など (2) 糖尿病－経口血糖降下薬など 事例2：対症療法薬を使用のケース (1) 疼痛－解熱鎮痛薬 (2) 悪心・嘔吐－制吐薬</p>	
3. 処方事例に応じた与薬の実際（事例演習）	4	<p>1. 「単元2」の学習をもとに、事例1・2の与薬の実際について演習する 1) 演習方法 (1) 事例1・2について ①医師の指示を確認 ②6R（患者、目的、薬物名、容量、用法、時間） ③薬物動態から患者の状態をアセスメント ④インフォームドコンセント ⑤与薬 ⑥与薬後のアセスメント ⑦評価 ⑧医療チームの連携・協働 ⑨服薬指導の視点で、自己・グループ学習を行う (2) 事例1・2について代表グループが①～⑨について実践する (3) 代表グループの実践について意見交換する (4) まとめ</p>	大島 慈代 (実務経験教員)
評価	筆記試験 1時間		
教科書	・系統看護学講座 別巻 臨床薬理学 井上 智子 他 (医学書院)		
参考書	・今日の治療薬 浦部 晶夫 他 (南江堂)		

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	
看護学原論Ⅰ	1 単位 30 時間	1 年次前期	
<p><目 的> 「看護とは何か」看護学が成立するための条件や看護学の構造などを学び、看護実践の基盤となる考え方を学習する。 看護の基本となる概念を、ナイチンゲールの看護の考え方を基盤に据えて学び、より健康的な生活をつくりだすために必要な考え方、看護の役割、看護を実践する一連の過程の基礎を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護とは何かを理解し（目的論）看護に必要な対象のみつめ方（対象論）を学び、看護を実践するための思考の道筋（方法論）を理解する 2. 看護の本質を理解し、専門職として看護師に要求される能力とはどのようなものかを理解する 3. 看護は他者への働きかけをする仕事であることの意味を学び、他者への責任をもつには確かな根拠をもち、相手の思いを尊重して関わることの重要性を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
導入	1	「看護学原論」で学ぶ内容の概要 学習の進め方など	本間 かほり (実務経験教員)
1. 看護の目的論	10	1. 看護とは何か 1) ナイチンゲールの看護一般論を「看護覚え書」「科学的看護論」ほか、を用いながら学習する 2) ナイチンゲールの看護論の骨子、基盤となる考え方 「看護観」「健康観」「生活観」 「人間観」「自然観」「生命力」 「生活過程」 3) 看護一般論の構造	
2. 看護の対象論	10	1. 看護の対象としての人間のみつめかた 1) 生物体・生活体の統一体である人間（人間一般論）生活過程の本質 ※自己の24時間の生活を客観視 2) 人間の一生（24時間の連続）と健康現象 (1) 生命を維持発展させる過程 (2) 生活習慣を維持発展させる過程 (3) 社会関係を維持発展させる過程 2. 人間の生活と健康現象 1) ライフサイクルモデル、健康的な生活リズム 2) ライフサイクルと病気の現れ 毒され群・衰え群・相互影響群	

3. 看護の方法論	9	<p>1. 看護実践は科学的根拠に裏打ちされた看護観の表現</p> <p>2. 看護師に必要とされる技術</p> <p>1) 実体に働きかける技術</p> <p>2) 認識に働きかける技術</p> <p>3) 看護過程を展開する技術</p> <p>3. 看護の方法論の骨子とモデル図の使い方</p> <p>「全体像モデル」「立体像モデル」</p> <p>「日常生活アセスメントモデル」</p> <p>「生命力アセスメントモデル」</p>	
評 価	レポート課題で評価する		
教科書	<p>・「看護覚え書」－看護であること看護でないこと－ フロレンス・ナイチンゲール（現代社）</p> <p>・「科学的看護論」 薄井 坦子 （日本看護協会出版会）</p> <p>・「ナースが視る人体」「ナースが視る病気」薄井 坦子 （講談社）</p>		
参考書	<p>・「何かなぜ看護の情報なのか」 薄井 坦子 （日本看護協会出版会）</p> <p>・「狼に育てられた子」 J. A. I. シング （福村出版）</p>		

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	
看護学原論Ⅱ	1 単位 30 時間	1 年次前期～後期	
<p><目 的></p> <p>主な看護理論家たちが著した看護理論の概要を学び、理論適応の範囲と限界を知り、実践場面での活用のイメージができるように深める。そして、ナイチンゲールが示した看護師に必要な考え方をもとに、看護場面で対象の危機状況に接する際に求められる役割やその際に生じる葛藤など、倫理的課題解決に向けた行動の基準や原則を学び、専門職業人としての意識を高める。また看護の機能と役割を支えるしくみや保健医療福祉の連携、看護の対象を取り巻く多職種との役割と看護師に求められる役割を学び、看護に対する理解を深める。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ナイチンゲールの看護論と比較して、看護理論と実践・各種理論の適応の範囲を知る 2. 看護の専門職業人として果たすべき責務を学習し、看護倫理の基礎的な考え方を理解する 3. 保健医療福祉チームの協働における看護師に期待する役割や課題を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 看護理論総説	7	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護理論とは <ol style="list-style-type: none"> 1) 看護理論の定義 2) 看護理論を使う意義 3) 看護理論のレベル 4) 看護理論の枠組み (主要概念) 2. 看護理論家たちの歴史的な流れ <ol style="list-style-type: none"> 1) ナイチンゲールからアメリカの主要な看護理論家 (バージニア・ヘンダーソン、ドロセア・E・オレム、マーサ・ロジャーズ、ジョイス・トラベルビー、シスター・カリスタ・ロイ、ヒルデガード・E・ペプロー、アイダ・ジーン・オーランド、アーネスティン・ウィーデンバック他) までを学習する。 	本間 かほり (実務経験教員)
2. 看護倫理序説	18	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護職と倫理 <ol style="list-style-type: none"> 1) 看護倫理を学ぶ意義 2) 職業倫理としての看護倫理 「看護者の倫理綱領」とは 3) 倫理的事例を通して考える 4) 看護倫理と患者の権利擁護 5) 演習 <ol style="list-style-type: none"> (1) 実習体験を「看護者の倫理綱領 (15 条)」に沿って比較検討し、臨床場面での看護学生としての姿勢・態度と結びつけて考えられるようになり、自己課題を明確にする。 <個人ワークーGWー発表ー事後レポート> 	

3. 看護活動と看護師	4	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護の機能と活動の場における特徴 2. 地域の保健医療活動と医療施設の連携 3. 看護活動の実践場所の特徴と期待される役割 4. 保健医療チームと看護 5. 保健医療福祉活動が直面する課題 	
評 価	筆記試験 1時間		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・系統看護学 別巻 看護倫理 宮坂道夫他（医学書院） ・看護職の基本的責務 2022年版 手島 恵（日本看護協会出版会） 		
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・新看護体系 看護学全書 専門分野 I 基礎看護学① 看護学概論 宮 脇 美保子 他 （メヂカルフレンド社） ・看護学テキスト N I C E 基礎看護学 看護理論 筒 井 真優美 （南江堂） 		

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	
看護場面に共通する技術 I	1 単位 30 時間	1 年次前期～後期	
<p><目 的></p> <p>看護師には、対象の実体と認識への働きかけをつうじて、その人の持てる力を最大限に働かせ、生活過程をつくりだす看護を、計画的に実践することが求められる。その時に用いられる看護技術には、「実体に働きかける技術」「認識そのものに働きかける技術」「看護過程を展開する技術」がある。実際の場面では、この3種類の技術を組み合わせて活用することになる。そこで、その中でも共通して使われる技術を取り上げ学習する。</p> <p>コミュニケーションは、基礎分野の『コミュニケーション論 I・II』を土台に、看護の目的をもったコミュニケーションへ発展させる。記録・報告では、より良い看護につながるために、看護師としての責任について意識できるようにする。安全・安楽では、これから学ぶ看護技術全般における危険や苦痛について学習し、援助の看護の視点となるようにする。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康な生活を送る人間にとってのコミュニケーションを学び看護の視点を理解する 2. 演習を通して対象の認識に働きかけるコミュニケーション技術について理解する 3. 健康な生活を送る人間にとっての安全・安楽を学び看護の視点を理解する 4. 看護における記録・報告の意義・目的・方法を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. コミュニケーション	19	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康な生活を送る人間にとってのコミュニケーションとは <ol style="list-style-type: none"> 1) 人間一般論、生活一般論、健康観からみたコミュニケーションについて <ol style="list-style-type: none"> (1) 学生の日常生活におけるコミュニケーションについて情報を収集する (2) 学生の情報をもとに、生活過程の本質に照らして考える (3) 精神と精神の交通 (4) 人間は個別の認識をもつ (5) 認識が健康に及ぼす影響 (6) 認識が生活の仕方に及ぼす影響 2. 看護におけるコミュニケーションとは <ol style="list-style-type: none"> 1) 看護におけるコミュニケーションの意義・目的 <ol style="list-style-type: none"> (1) 看護は過程である (看護の原基形態) (2) 三重の関心を注いだ看護実践から、コミュニケーションの意義・目的を考える 2) 認識そのものに働きかける技術 <ol style="list-style-type: none"> (1) コミュニケーションの過程的構造 (認識—表現) <ol style="list-style-type: none"> ① 対象の認識 ② 対象を見つめる看護師の認識のあり方 	中井 史世 (実務経験教員)

		<p>(2) 観念的追体験とは</p> <p>(3) コミュニケーション技術の目標行動</p> <p>①対象の頭の中を浮き彫りにする</p> <p>②伝達内容の像を対象の頭の中につくる</p> <p>③より良い状態の像を創り上げそれに向かう意思を高める</p> <p>3) 演習</p> <p>(1) 事例</p> <p>「18歳、女性、看護学生、風邪で学校を4日間欠席。体調が回復し、登校した時の一場面。」</p> <p>(2) 技術項目：ロールプレイ</p> <p>4) 演習</p> <p>(1) 事例</p> <p>「『基礎看護学実習Ⅱ』の受け持ち患者とのコミュニケーション場面」</p> <p>(2) 技術項目：プロセスレコード</p>	
2. 安全・安楽	6	<p>1. 健康な生活を送る人間にとっての安全・安楽とは</p> <p>1) 人間一般論、生活一般論、健康観、看護一般論からみた安全・安楽について</p> <p>(1) 学生の日常生活において安全・安楽について感じることを情報収集する</p> <p>(2) 学生の情報をもとに、生活過程の本質に照らして考える</p> <p>2) 安全を守る技術の目標行動</p> <p>(1) 生命力のおびやかさを最小にする</p> <p>3) 安楽をはかり効率を高める技術の目標行動</p> <p>(1) 最小のエネルギーで最大の効果をあげる</p> <p>①安楽な体位の保持</p> <p>②ボディメカニクスの基本</p> <p>③安楽への援助</p> <p>4) 演習（基本技術）</p> <p>(1) 技術項目</p> <p>①安楽な体位</p> <p>②ボディメカニクス</p>	佐々木 梓 (実務経験教員)
3. 記録・報告	4	<p>1. 看護をする上で必要な記録・報告とは</p> <p>1) 記録・報告技術の目標行動</p> <p>(1) 対象を見つめる看護師の認識—看護実践へのつながり</p> <p>(2) ナイチンゲール看護一般論—小管理について</p>	中井 史世 (実務経験教員)

		<p>2) 記録について</p> <p>(1) 記録で重要なもの(事実)</p> <p>(2) 医療における記録の種類と管理</p> <p>(3) 看護記録に関する法的規定</p> <p>(4) 看護記録の種類と目的</p> <p>(5) 看護記録上の原則と留意点</p> <p>(6) 看護記録の記載方法</p> <p>3) 報告について</p> <p>(1) 報告で重要なもの(事実)</p> <p>(2) 報告の種類と目的</p> <p>(3) 適切な報告の条件</p> <p>4) 演習(基本技術)</p> <p>(1) 技術項目</p> <p>① 記録</p> <p>② 報告</p>	
評価	筆記試験 1時間		
教科書	<p>・科学的看護論 薄井坦子 (日本看護協会出版会)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔2〕基礎看護技術Ⅰ 有田清子 他 (医学書院)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 有田清子 他 (医学書院)</p>		
参考書			

	7	<p>ント</p> <p>2) 呼吸</p> <p>(1) 呼吸への看護の視点</p> <p>(2) 必要な知識</p> <p>(3) 呼吸調整のメカニズムと影響因子</p> <p>(4) 呼吸音の聴取方法とアセスメント</p> <p>3) 体温</p> <p>(1) 体温への看護の視点</p> <p>(2) 必要な知識</p> <p>(3) 体温調整のメカニズムと影響因子</p> <p>(4) 体温測定の方法とアセスメント</p> <p>4) 全身の観察</p> <p>(1) 視診・触診・聴診・打診</p> <p>(2) 全体状態・全体印象の把握</p> <p>(3) 計測</p> <p>5) 演習</p> <p>(1) 技術項目 (基本技術)</p> <p>①バイタルサイン測定</p> <p>4. 生命を維持する働きのケア</p> <p>1) 演習</p> <p>(1) 技術項目 (基本技術)</p> <p>①呼吸器系・循環器系の精神面・物質面の観察技術 (フィジカルイグザミネーション)</p> <p>②呼吸器系・循環器系の精神面・物質面のアセスメント (フィジカルアセスメント)</p>	
2. 人間を統合する脳の働きの看護	6	<p>1. 人間を統合する脳の働きのケア</p> <p>[学習の視点]</p> <p>人間の脳には、生きる力、生活する力、人と関わる力を働かせる高度な機能が組み込まれている。個別な看護を目指すうえで根幹をなす、その人らしさをつくりだすしくみとそのあらわれについて学ぶ。</p> <p>1) 演習</p> <p>(1) 技術項目 (基本技術)</p> <p>①感覚器系・運動系・神経系の精神面・物質面の観察技術 (フィジカルイグザミネーション)</p> <p>②感覚器系・運動系・神経系の精神面・物質面のアセスメント (フィジカルアセスメント)</p>	辻 早 (実務経験教員)
3. 食物を消化吸収する働きの看護	6	<p>1. 食物を消化吸収する働きのケア</p> <p>[学習の視点]</p> <p>人間の消化、吸収を担う臓器の健康状態は、その人の認識のありように支配されている。健康を実現するためのカギは、食に</p>	

		<p>あることを学ぶ。</p> <p>1) 演習</p> <p>(1) 技術項目 (基本技術)</p> <p>① 消化器系の精神面・物質面の観察技術 (フィジカルイグザミネーション)</p> <p>② 消化器系の精神面・物質面のアセスメント (フィジカルアセスメント)</p>	
評価	筆記試験 1時間		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・ 系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学〔2〕基礎看護技術 I 有田 清子 他 (医学書院) ・ 科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会) ・ 看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社) ・ 看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社) 		
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・ 看護学テキスト N I C E 基礎看護学 基礎看護技術 香春 知永 他 (南江堂) 		

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	
生活過程を整える技術 I	1 単位 30 時間	1 年次前期～後期	
<p><目 的></p> <p>看護は、対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えることにある。その生活過程は、「生命を維持発展する過程」「生活習慣を獲得し発展させる過程」「社会関係を維持発展させる過程」で支えられており、人間の一生は 24 時間の連続でつくられる。</p> <p>その中でも、「生活習慣を獲得し発展させる過程」について取り上げ学習する。</p> <p>人間の健康にとっての「食」および「排泄」の概念をおさえ、食と排泄のバランスを整え“日々の生活を安楽”にするための看護の視点や援助技術を習得する。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の健康にとっての食・排泄の意義を理解する 2. 食・排泄の看護の視点を理解する 3. 食事・排泄の基本技術を習得する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 健康と食事	10	<p>1. 人間の健康にとっての「食」とは 〔学習の視点〕</p> <p>細胞のつくりかえに必要な摂取→自己化→排出の意味を「ナースが視る病気」を活用し学習する。そして、認識が食を決定し人間の健康に影響することを前提に、食と排泄のバランスを整えていく看護について学習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 学生の食生活の情報を収集する 2) 学生の情報をもとに、健康な生活を送る人間にとっての食について考える <p>2. 食と排泄のバランスを整えていくための看護</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 食事の意義・目的 2) 看護の視点 <ol style="list-style-type: none"> (1) 食のアセスメント（学生の食生活の情報をを用いてアセスメントをする） <ol style="list-style-type: none"> ①食の必要条件（精神面・物質面） ②食への看護の視点 ③必要な知識 3) 食事の基本技術 <ol style="list-style-type: none"> (1) 食事観察技術 (2) 食事介助技術 (3) 食を促す技術 (4) 経管栄養法 4) 演習（基本技術） <ol style="list-style-type: none"> (1) 技術項目 <ol style="list-style-type: none"> ①食事介助技術 <p>*アセスメント、援助計画の立案を含む</p> 5) 演習（基本技術） <ol style="list-style-type: none"> (1) 技術項目 	大島 慈代 (実務経験教員)

		①経管栄養法	
2. 健康と排泄	19	<p>1. 人間の健康にとっての「排泄」とは 〔学習の視点〕 細胞のつくりかえに必要な摂取→自己化→排出の意味を「ナースが視る病気」を活用し学習する。そして、認識が排泄を決定し人間の健康に影響することを前提に、食と排泄のバランスを整えていく看護を学習する。さらに、清潔との関連についても学習する。</p> <p>1) 学生の排泄習慣の情報を収集する 2) 学生の情報をもとに、健康な生活を送る人間にとっての排泄について考える</p> <p>2. 食と排泄のバランスを整えていくための看護</p> <p>1) 排泄の意義・目的 2) 看護の視点 (1) 排泄のアセスメント (学生の排泄習慣の情報をういてアセスメントをする) ①排泄の必要条件 (精神面・物質面) ②排泄への看護の視点 ③必要な知識</p> <p>3) 排泄の基本技術 (1) 排泄の観察技術 (2) 排泄介助技術 (3) 排泄を促す技術</p> <p>4) 患者の状態に応じた排泄の看護技術 (1) 失禁している患者のケア (2) 膀胱留置カテーテル (3) 浣腸・摘便</p> <p>5) 演習 (基本技術) (1) 技術項目 ①排泄介助技術</p>	浅野 智子 (実務経験教員)
評価	筆記試験 1時間		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会) ・系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 有田 清子 他 (医学書院) 		
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社) ・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社) 		

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	
生活過程を整える技術Ⅱ	1 単位 30 時間	1 年次前期～後期	
<p><目 的></p> <p>看護は、対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えることにある。その生活過程は、「生命を維持発展する過程」「生活習慣を獲得し発展させる過程」「社会関係を維持発展させる過程」で支えられており、人間の一生は 24 時間の連続でつくられている。その中でも、「生活習慣を獲得し発展させる過程」について取り上げ学習する。</p> <p>人間の健康にとっての「運動」および「休息」の概念をおさえ、運動と休息のバランスを整え“日々の生活を安楽”にするための看護の視点と援助技術を習得する。また、人間の健康にとっての「清潔」および「衣」の概念をおさえ、個人の習慣を尊重し、より良い清潔を保ち“日々の生活を安楽”にするための看護の視点と援助技術を習得する。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の健康にとっての運動・休息・清潔・衣の意義を理解する 2. 運動・休息・清潔・衣の看護の視点を理解する 3. 運動・休息・清潔・衣の基本技術を習得する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 健康と運動・休息	6	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の健康にとっての「運動」・「休息」とは 〔学習の視点〕 人間にとって運動と休息により統一体としての調和を保っていることを「ナースが視る病気」を活用して運動と休息が人間の健康にとっての土台であることを学習する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 学生の運動・休息の習慣の情報を収集する 2) 学生の情報をもとに、健康な生活を送る人間にとっての運動・休息について考える 2. 運動と休息のバランスを整えていくための看護 <ol style="list-style-type: none"> 1) 運動・休息の意義・目的 2) 看護の視点 <ol style="list-style-type: none"> (1) 運動・休息のアセスメント（学生の運動・休息習慣の情報をを用いてアセスメントをする） <ol style="list-style-type: none"> ①運動・休息の必要条件（精神面・物質面） ②運動・休息への看護の視点 ③必要な知識 3) 運動・休息の基本技術 <ol style="list-style-type: none"> (1) 観察技術 (2) 体位・移動介助技術 (3) 睡眠・休息を促す技術 4) 演習（基本技術） <ol style="list-style-type: none"> (1) 技術項目 <ol style="list-style-type: none"> ①良い姿勢の保持 	佐々木 梓 (実務経験教員)

<p>評 価</p>	<p>筆記試験 1時間 (30%) 技術試験 (70%) を総合評価する</p>
<p>教科書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会) ・系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 有田 清子 他 (医学書院)
<p>参考書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社) ・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社)

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	
生活過程を整える技術Ⅲ	1 単位 30 時間	1 年次前期～後期	
<p><目 的></p> <p>看護は、対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えることにある。その生活過程は、「生命を維持発展する過程」「生活習慣を獲得し発展させる過程」「社会関係を維持発展させる過程」で支えられており、人間の一生は 24 時間の連続でつくられている。その中でも、「社会関係を維持発展させる過程」について取り上げ学習する。</p> <p>人間の健康にとっての「環境」「労働」「性」の概念をおさえ、“その人を尊重した”生活を整えられるように、看護の視点、援助技術を習得する。また、『看護場面に共通する技術Ⅰ』（単元「安全・安楽」）での学習を土台に感染予防の基本技術について習得する。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の健康にとっての環境・労働・性・感染予防の意義を理解する 2. 環境・労働・性・感染予防の看護の視点を理解する 3. 環境・感染予防の基本技術を習得する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 健康と環境	13	<p>1. 人間の健康にとっての「環境」とは 〔学習の視点〕</p> <p>自然との連関が正常に維持される環境の中で最も健康的に存在することができる。人間は独自の存在様式を作り出しているため、その人間社会との連関が正常に維持されることが健康上不可欠となることを学習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 自分の生活環境について情報を収集する 2) 学生の情報をもとに、健康な生活を送る人間にとっての生活環境について考える <p>2. 良い生活環境を整える看護</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 生活環境を整える意義・目的 2) 看護の視点 <ol style="list-style-type: none"> (1) 生活環境のアセスメント（学生の生活環境の情報をを用いてアセスメントをする） <ol style="list-style-type: none"> ①生活環境の必要条件（精神面・物質面） ②環境への看護の視点 ③必要な知識 3) 環境調整の基本技術 <ol style="list-style-type: none"> (1) 観察技術 (2) 環境調整技術 4) 演習 <ol style="list-style-type: none"> (1) 技術項目（基本技術） <ol style="list-style-type: none"> ①病床環境の整備 ②ベッドメイキング ③リネン交換 	辻 早 (実務経験教員)

		*アセスメント、援助計画の立案を含む	
2. 健康と労働・性	4	<p>1. 人間の健康にとっての「労働」・「性」とは 〔学習の視点〕 一人ひとりの人間が生きる喜びを実現し、社会の制約の中で個を整え発揮して生きていることを学習する。</p> <p>1) 自分の生きる喜びについて情報を収集する</p> <p>2) 学生の情報をもとに、社会の制約の中で生活を送る人間にとっての生きる喜びについて</p> <p>2. その人を尊重し、その人らしい生活を整える看護</p> <p>1) 労働・性の意義・目的</p> <p>2) 看護の視点</p> <p>(1) 労働・性のアセスメント(学生の情報を用いてアセスメントをする)</p> <p>①労働・性の必要条件(精神面・物質面)</p> <p>②労働・性への看護の視点</p> <p>③必要な知識</p> <p>(2) 看護としての支援</p>	浅野 智子 (実務経験教員)
3. 健康と感染予防	12	<p>1. 人間の健康にとっての感染予防とは 〔学習の視点〕 人間が健康的に生きるためには、生態系のバランスを乱さないように自然界との関係を整えることを学習する。</p> <p>1) 自己の経験(風邪)から前後の身体の状態について情報を収集する</p> <p>2) 学生の体験をもとに、感染予防について考える</p> <p>2. 感染を予防する看護</p> <p>1) 感染予防の意義・目的</p> <p>2) 看護の視点</p> <p>(1) 感染徴候のアセスメント(学生の情報を用いてアセスメントをする)</p> <p>①感染予防への看護の視点</p> <p>②必要な知識</p> <p>3) 感染予防の基本技術</p> <p>(1) 観察技術</p> <p>(2) 感染予防技術</p> <p>4) 演習(基本技術)</p> <p>(1) 技術項目</p> <p>①手洗い</p> <p>②無菌操作</p>	佐々木 梓 (実務経験教員)

		<p>5) 演習 (基本技術)</p> <p>(1) 技術項目</p> <p>①個人防御用具の着脱</p> <p>②感染性廃棄物の取り扱い</p> <p>*アセスメント、援助計画の立案を含む</p>	
評 価	筆記試験 1時間		
教科書	<p>・科学的看護論 薄井坦子 (日本看護協会出版会)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学〔3〕基礎看護技術II 有田清子 他 (医学書院)</p>		
参考書	<p>・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井坦子 (講談社)</p> <p>・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井坦子 (講談社)</p>		

専門分野 基礎看護学

科目名		単位数	開講期
診療過程における看護技術 I		1 単位 15 時間	1 年次後期
<p><目 的></p> <p>ナイチンゲールの病気観は、「日々の生活の中で衰えたり毒されたりするプロセスが気づかずして進行しており、それらと自然の回復力との力関係の結果として病気が現れてくる」と定義している。医師は、健康現象を分析し、その因果関係を追及しながら健康レベルの向上のために診断・治療を行う。医療従事者は対象の健康を守るという共通の目的意識に支えられた専門職種であり、各職種は其中で独自の役割を担っている。そのため、看護者は健康障害の種類、健康の段階によってどのような診察・検査・治療が展開されるかの専門知識の修得に努めるとともに、他の医療関係者と協働して診察・検査・治療をたすける看護技術を身につけなければならない。</p> <p>そこで、診療過程における看護師の責任と役割と、診察および検査に伴う看護について学ぶ。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 診断・治療をたすける看護について理解する 2. 診察の介助を安全・安楽に実施するための目的・方法（原理原則）を理解する 3. 検査の介助を安全・安楽・正確に実施するための目的と方法（原理原則）を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 診断・治療をたすける看護	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康観・病気観について 〔学習の視点〕 本来、人間の生命力は健康を保とうとする働きを持っている。対象がどのような生活上の不都合を抱えて診療を求めてきたかという視点から看護を学ぶ。 2. 診療過程における看護師の責任と役割 <ol style="list-style-type: none"> 1) 病気観について 2) 健康観について 3) 対象の認識と健康障害との関係 4) 看護師の責任と役割 <ol style="list-style-type: none"> (1) 診断・治療を効果的に進むよう 24 時間の生活過程を整える (2) 個別な障害因子を発見し取り除く (3) 診断・治療をたすける看護 	石黒 美行 (実務経験教員)
2. 診察に伴う看護	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 診断過程の理解と看護 <ol style="list-style-type: none"> 1) 診察の目的と種類 2) 診察方法・留意点 3) 診察を受ける対象の認識 4) 看護の実際 <ol style="list-style-type: none"> (1) 受診に伴う不快を最小にする 	

<p>3. 検査に伴う看護</p>	<p>10</p>	<p>1. 検査の介助</p> <p>1) 検査の目的と種類 (1) 生体検査 (2) 検体検査</p> <p>2) 検査の方法・留意点</p> <p>3) 検査を受ける対象の認識</p> <p>4) 看護の実際 (1) 検査に伴う不快を軽減する</p> <p>5) 演習 (1) 技術項目 (基本技術) ① 検尿 ② 採血 *アセスメント、援助計画の立案を含む (2) 事例 (応用技術; 基本技術→応用技術への思考の訓練) 「60歳代、女性、発熱と嘔気、倦怠感のある患者。医師より検尿と採血の指示を受け、実施する場面。」</p>	
<p>評価</p>	<p>筆記試験 1時間</p>		
<p>教科書</p>	<p>・科学的看護論 薄井坦子 (日本看護協会出版会) ・系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 有田清子 他 (医学書院)</p>		
<p>参考書</p>			

専門分野 基礎看護学

科目名		単位数	開講期
診療過程における看護技術Ⅱ		1 単位 30 時間	1 年次後期
<p><目 的> 『診療過程における看護技術Ⅰ』で学習した診療過程における看護師の責任と役割のもとに、対象が安全・安楽で安心して治療が受けられるように、治療・処置に伴う看護について学ぶ。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 呼吸・循環を整える技術を安全・安楽・正確に実施するための目的・方法（原理原則）を理解する 与薬の技術を安全・安楽・正確に実施するための目的・方法（原理原則）を理解する 創傷管理の技術を安全・安楽・正確に実施するための目的・方法（原理原則）を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 治療・処置に伴う看護	12	<ol style="list-style-type: none"> 治療・処置の介助・補助 <ol style="list-style-type: none"> 治療・処置の目的と種類 治療・処置の方法・留意点 治療・処置を受ける患者の認識 看護の実際 <ol style="list-style-type: none"> 呼吸・循環を整える看護 与薬・輸血の看護 創傷管理の看護 洗浄・穿刺の看護 演習 <ol style="list-style-type: none"> 技術項目（基本技術） <ol style="list-style-type: none"> 酸素吸入（酸素ポンベの操作と酸素量の計算） 排痰ケア（気道内加湿、体位ドレナージ、吸引） 末梢循環促進（温罨法・冷罨法） *アセスメント、援助計画の立案を含む *マッサージは講義で学習する 事例（応用技術；基本技術→応用技術への思考の訓練） 「76歳、男性、心疾患の患者。咳嗽、夜間の呼吸苦と不眠にて外来受診する。検査にて、入院治療をすることとなった。」 	石黒 美行 (実務経験教員) 大島 慈代 (実務経験教員)
	8	<ol style="list-style-type: none"> 演習 <ol style="list-style-type: none"> 技術項目（基本技術） <ol style="list-style-type: none"> 与薬法（経口与薬・直腸内与薬・外用薬の貼付） 注射法（筋肉・静脈内） 輸液法（輸液管理・滴下調整） 	

	9	<p>*アセスメント、援助計画の立案を含む</p> <p>*皮下注射は技術演習を行う</p> <p>(2) 事例 (応用技術; 基本技術→応用技術への思考の訓練)</p> <p>「76歳、男性、心疾患の患者。咳嗽、夜間の呼吸苦と不眠にて外来受診する。検査にて、入院治療をすることとなった。」</p> <p>7) 演習</p> <p>(1) 技術項目 (基本技術)</p> <p>①創傷処置</p> <p>②包帯法</p> <p>*アセスメント、援助計画の立案を含む</p> <p>(2) 事例 (応用技術; 基本技術→応用技術への思考の訓練)</p> <p>「57歳、女性、変形性膝関節症で手術後7日の患者。医師が、手術創の抜鉤をする場面。」</p>	<p>佐々木 梓 (実務経験教員)</p>
評価	筆記試験 1時間		
教科書	<p>・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 有田 清子 他 (医学書院)</p>		
参考書	<p>・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社)</p> <p>・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社)</p>		

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	
臨床看護技術	1 単位 15 時間	2 年次前期	
<p><目 的></p> <p>看護師には、対象の実体と認識への働きかけをつうじて、その人の持てる力を最大限に働かせ、生活過程をつくりだす看護を、計画的に実践することが求められる。その時に用いられる看護技術には、「実体に働きかける技術」「認識そのものに働きかける技術」「看護過程展開技術」がある。実際の場面ではこの3種類の技術を組み合わせて活用することになる。対象に合わせて、どの看護技術をどのように用いるのかは、臨床での看護師の認識（判断）に掛かっている。</p> <p>そこで、看護師の臨床判断の考え方と看護技術の適応のさせ方について学ぶ。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護場面における看護師の臨床判断の考え方がわかる 2. 対象の状況に応じた看護技術の適応の方法がわかる 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 臨床看護とは	2	1. 臨床看護とは <ol style="list-style-type: none"> 1) 臨床看護とは 2) 看護師の役割 <ol style="list-style-type: none"> (1) 看護師の業務の範囲 <ol style="list-style-type: none"> ①看護活動の場（領域） ②発達段階 ③健康段階 ④健康障害 ⑤対象の単位 ⑥生活機能 	永 洞 文 子 (実務経験教員)
2. 看護師の臨床判断プロセス	4	1. 看護師の臨床判断プロセス <ol style="list-style-type: none"> 1) 臨床判断とは <ol style="list-style-type: none"> (1) 臨床判断の位置づけ (2) 問題解決のプロセス (3) 臨床判断の考え方 <ol style="list-style-type: none"> ①気づき ②解釈 ③反応 ④省察 	
3. 臨床判断と看護介入に必要な情報と視点	4	1. 臨床判断と看護介入に必要な情報と視点 <ol style="list-style-type: none"> 1) 発達段階と看護 2) 健康障害の種類 3) 健康の段階 (急性期・回復期・慢性期・終末期) 4) 生活過程の特徴 	
4. 臨床看護の実際	4	1. 演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 目的 「臨床判断の考え方と対象の状態・状況に応じた看護技術の適応方法を学ぶ」 2) 事例 「72歳、女性、脳梗塞、リハビリテーション期にある患者。10:00の状態観察の結 	

		<p>果から、対象の状態をアセスメントし、その日の看護を計画・実践しようとしている場面。」</p> <p>3) 演習方法 (1) 事例紹介 (『看護過程展開の技術』と同一の事例) - GW-ロールプレイ-デブリーフィング-事後レポート</p> <p>4) GWの視点 (1) 気づき、解釈 (2) 反応 (援助計画の立案)</p> <p>5) ロールプレイ-デブリーフィング (1) 援助計画の実施 (看護技術の適応) (2) 省察</p>	
<p>評価</p>	<p>筆記試験 1時間</p>		
<p>教科書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会) ・系統看護学講座 基礎看護学4 臨床看護総論 香春 知永他 (医学書院) 		
<p>参考書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社) ・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社) ・看護過程に沿った対象看護 高木 永子 他 (学研メディカル秀潤社) ・疾患別 看護過程の展開 第5版 山口 瑞穂子 他 (学研メディカル秀潤社) 		

専門分野 基礎看護学

科目名		単位数	開講期
看護過程展開の技術		1 単位 30 時間	1 年次後期
<p><目 的></p> <p>看護師には、対象の実体と認識への働きかけを通じて、その人の持てる力を最大限に働かせ、生活過程を整える看護を、計画的に実践することが求められる。その時に用いられる看護技術には、「実体に働きかける技術」「認識そのものに働きかける技術」「看護過程展開技術」がある。実際の場面では、この3種類の技術を組み合わせて活用することになる。</p> <p>そこで、「看護過程展開技術」を取り上げ、科学的根拠にもとづいた看護を展開するための思考過程を学ぶ。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 科学的根拠にもとづいた看護を実践するための思考過程を理解する 2. 対象理解における第一の関心の必要性について演習をとおして理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 科学的看護論での看護過程演習	24	<ol style="list-style-type: none"> 1. 科学的看護論での看護過程（一部）演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 紙上事例 「64歳、男性、糖尿病、慢性期」 2) 演習方法 個人ワーク－GW－発表－まとめ－事後レポート <ol style="list-style-type: none"> (1) 第一の関心 <ol style="list-style-type: none"> ①全体像モデル ②3つの柱と12項目 ③立体像モデル ④対象特性 ⑤生物体の必要条件（看護の方向性） 3) 個人ワーク <ol style="list-style-type: none"> (1)授業の進行に合わせて課題に取り組む 4) GWの視点 <ol style="list-style-type: none"> (1)個人ワークをもとに、対象理解の考え方について認識を揃える 	中井史世 (実務経験教員)
2. 看護過程のまとめ	6	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護過程（一部）のまとめ <ol style="list-style-type: none"> 1) 事例 『基礎看護学実習Ⅱ』の受け持ち患者 2) 演習方法 個人ワーク－実習担当教員の指導－GW－発表－まとめ－事後レポート 3) 個人ワーク <ol style="list-style-type: none"> (1)『基礎看護学実習Ⅱ』の受け持ち患者の対象特性を描き、看護の方向性を整理する 4) GWの視点 <ol style="list-style-type: none"> (1)看護になるとは 	

評 価	演習（100％）を総合評価する
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的看護論 薄井 坦子（日本看護協会出版会） ・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子（講談社） ・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子（講談社）
参考書	

専門分野 地域・在宅看護論

科目名		単位数	開講期
地域・在宅看護論 I		1 単位 15 時間	1 年次前期
<p><目 的></p> <p>地球上の至る所で人間はさまざまな文化を築いてきた。それらは、基本的には自然の法則に支配されている。人間は、自然現象や先人の生活の知恵を社会的に伝承し、その知恵を用いて自然をつくりかえ、生命維持に適した場を広げ生活様式を自在につくりだしてきた。また、人間は、家族の中に生まれ、家族を基盤としてその地域社会に通用する生活習慣を身につける。個人の健康状態は、両親の暮らしぶりやその地域の健康を守る社会システムのレベルに影響される。</p> <p>そこで、健康を支援する（健康の法則＝看護の法則）看護師は、自分が住む地域に関心を持ち、暮らしとは何か、暮らしが健康に与える影響について学ぶ。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暮らし（生活）を理解する 2. 暮らし（生活）が健康に与える影響を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 暮らということ	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 暮らということ 1) 子ども生み育てる 2) 学ぶ、働く 3) 病を治す 4) 老いとともに生きる 5) 最期を迎える 	山下 直美 (実務経験教員)
2. 支え合って生きるとは	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 支え合って生きるとは 1) 家族 2) 仲間 3) 近隣の人々 4) 学校や職場 5) 支え合い 	
3. 地域の生活環境が健康に与える影響	11	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域の生活環境が健康に与える影響 1) 文化的環境 2) 社会的環境 3) 自然環境 2. 演習 1) 目的 「人々の生活圏・生活環境をフィールドワークで理解し、環境が生活にどう影響するかを考える」 2) 演習方法 個人ワークーGWー地域リサーチ・インタビューーGWー発表ーまとめー事後レポート 3) GWの視点 (1) 湯川地区の環境（世帯数、人口、施設など）歴史・文化について調べ地域の特徴をリサーチ 	

		<p>(2) 24時間のライフサイクルとコミュニティとの関連をリサーチ</p> <p>①交通機関 ②商業施設 ③病院 ④施設 ⑤教育機関 ⑥行政機関 ⑦住宅環境 ⑧道路状況</p> <p>(3) (1)と(2)より、演習目的について意見を交換し発表する</p>	
評価	演習(50%) 筆記試験(50%)		
教科書	<p>・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論(1) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論(2) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院)</p>		
参考書			

専門分野 地域・在宅看護論

科目名	単位数	開講期	
地域・在宅看護論Ⅱ	1 単位 15 時間	2 年次前期	
<p><目 的></p> <p>わが国は、他国に類をみない速さで進展する少子・超高齢社会にあり、それは生産年齢人口の著しい減少という事態を招いている。この変化は、従来型の病院中心・医療従事者主導の医療の仕組みを根本的から見直し必要性を示唆するものである。これからの看護師には、地域包括ケアシステムなどの中で、その役割を遂行することが求められる。</p> <p>そこで、地域・在宅看護論の対象者を、地域で生活する人々と広くとらえ、変化する地域社会に目を向け、地域で生活する人々とその家族の持てる力を働かせ生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会情勢の変化から地域・在宅看護論の対象と看護の特性を理解する 2. 地域で生活する人々とその家族を支える制度と社会資源を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 地域・在宅看護論の対象	8	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域・在宅看護論の基盤となる概念 <ol style="list-style-type: none"> 1) 地域・在宅看護論の社会背景 <ol style="list-style-type: none"> (1) 少子・超高齢社会 (2) 疾病構造の変化 (3) 健康や療養の考え方の多様化 2) 地域・在宅看護論とは <ol style="list-style-type: none"> (1) 療養者中心の医療・看護 (2) 看護の倫理 (3) 療養者の権利の保障 3) 地域・在宅看護論の対象 <ol style="list-style-type: none"> (1) 個人を対象とする看護 (2) 集団を対象とする看護 (3) 地域で暮らすすべての人々 (4) 健康の段階（健康～終末期まで） (5) 発達段階（胎児期～老年期まで） (6) 家族 2. 演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 目的 「地域・在宅看護論の対象は地域で暮らすすべての人々であり、多様な場で看護が提供されていることをフィールドワークで理解する」 2) 演習方法 個人ワークーGWー看護の多様な場をリサーチ・インタビューーGWー発表ーまとめー事後レポート 3) GWの視点 <ol style="list-style-type: none"> (1) 函館市の世帯数、家族形態、人口動態などについて調べ地域の特徴をリサーチ (2) 看護の多様な場をリサーチ <ol style="list-style-type: none"> ①病院（外来・入院）、診療所 	山下直美 (実務経験教員)

		②居宅（自宅・施設） ③療養通所介護事業所 ④訪問看護事業所 ⑤看護小規模多機能型居宅介護 ⑥通所サービス ⑦地域包括支援センター ⑧介護施設・老人保健施設など (3)(1)と(2)より、演習目的について意見を交換し発表する	
2. 地域・在宅看護論に関する法と制度と施策	4	1. 地域・在宅看護論に関する法と制度と施策 1) 訪問看護制度の法的枠組み (1) 医療保険法 (2) 介護保険法 (3) 障害者総合支援法 (4) 権利保障に関する法と施策 2) 生活保護 3) 高齢者の保健事業と医療 4) 障害者を支える制度 5) 難病療養者に対する制度 6) 子どもを対象とする制度 7) 在宅療養者の権利を擁護する制度	長谷山 哲平
3. 地域・在宅看護論における社会資源の活用	2	1. 地域・在宅看護論における社会資源の活用 1) 人的資源、物的資源 2) 社会資源活用における看護職の役割	
評価	筆記試験 1 時間 (50%) 演習 (50%) を総合評価する		
教科書	・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論 (1) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院) ・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論 (2) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院)		
参考書			

専門分野 地域・在宅看護論

科目名		単位数	開講期
地域・在宅看護論Ⅳ		1 単位 15 時間	3 年次前期
<p><目 的> 在宅療養者とその家族を支える訪問看護の概要と制度・看護活動について学び、在宅療養者とその家族の持てる力を働かせ、生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標> 1. 在宅療養を必要とする人と家族の特性をふまえ、訪問看護の役割を理解する</p>			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 在宅療養者を支える訪問看護	14	1. 訪問看護の対象者 1) 法制度からみた対象者 2) ライフサイクルからみた対象者 3) 健康レベルからみた対象者 4) 状態別・状況別からみた対象者 5) 生活の場・地域からみた対象者 2. 在宅療養の成立条件 1) 療養者・家族側 2) サービス提供者 3. 在宅療養者への看護活動 1) 在宅療養者の自立・自律支援 (1) 価値観の尊重と意思決定支援 (2) QOLの維持・向上 (3) セルフケア (4) 社会参加 2) 病状・病態の予測と予防 4. 家族への支援 1) 在宅看護と家族 2) 家族介護者の個別性に応じた支援 (1) 家族の介護力のアセスメントと調整 (2) 家族関係の調整 (3) ケア方法の指導 (4) レスパイトケア 5. 訪問看護の概要 1) 訪問看護の提供方法と種類 2) 訪問看護サービスの仕組みと提供 6. 演習 1) 目的 「初回訪問を体験し、訪問看護の特徴について知る」 2) 事例 「55歳、男性、パーキンソン病、妻と2人暮らし、2人の子どもは独立している」最近、起立性低血圧・便秘などの自律神経症状が出現したため、A病院から訪問看護ステーションに訪問看護の依頼があり、初	山下直美 (実務経験教員)

		<p>回訪問を行うことになった。」</p> <p>3) 演習方法 事例紹介－GW－ロールプレイ－GW－ 発表－まとめ－事後レポート</p> <p>4) ロールプレイ・GWの視点</p> <p>(1) 在宅療養の成立条件と在宅療養者の自立・自立支援について考えられているか</p> <p>(2) (1) をふまえて、訪問時に情報収集する内容と訪問時の行動計画を考える</p> <p>(3) 訪問時の行動計画に、初回訪問の重要性と訪問マナーが考えられているか</p>	
<p>評価</p>	<p>筆記試験 1時間</p>		
<p>教科書</p>	<p>・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論(1) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論(2) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院)</p>		
<p>参考書</p>			

専門分野 地域・在宅看護論

科目名	単位数	開講期	
地域・在宅看護論Ⅵ	1 単位 30 時間	3 年次前期	
<p><目 的></p> <p>在宅で療養する対象とその家族の生活を継続するための、健康の段階に応じた看護と社会資源の活用・調整、また、健康障害に応じた家族支援の方法と在宅療養者の価値観、人生観を尊重し、自己決定を支える看護を学ぶ。さらに、在宅において、安全でより良い看護を実践するために必要な臨床判断の方法について学ぶ。</p> <p>そこで、地域で生活しながら療養する人々とその家族の持てる力を働かせ、対象とその家族の生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 在宅療養者の健康の段階に応じた看護と社会資源の活用・調整と看護を理解する 2. 在宅療養を継続するために在宅療養者の健康障害に応じた、家族への支援と看護を理解する 3. 在宅療養者と家族の状況から必要な看護を判断（臨床判断）し、療養者と家族を支えるための看護について理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 在宅療養者の健康の段階に応じた看護	10	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康の段階に応じた看護 <ol style="list-style-type: none"> 1) 日常生活動作の低下のある療養者 <ol style="list-style-type: none"> (1) 日常生活のアセスメント (2) 社会資源の活用・調整 2) 疾病の再発予防が必要な療養者 <ol style="list-style-type: none"> (1) 異常の早期発見と対応 (2) 社会資源の活用・調整 3) 急性期にある療養者 <ol style="list-style-type: none"> (1) 緊急性と重症度のアセスメント (2) 状態に合わせた対応・調整 (3) 性症状への対応 (4) 社会資源の活用・調整 4) 慢性期にある療養者 <ol style="list-style-type: none"> (1) 慢性期の特徴を踏まえた状態のアセスメント (2) 状態に合わせた対応・調整 (3) 急性増悪の早期発見と対応 (4) 社会資源の活用・調整 5) リハビリテーション期にある療養者 <ol style="list-style-type: none"> (1) 在宅におけるリハビリテーション (2) 日常生活動作のアセスメント (3) 状態に合わせた対応・調整 (4) 住居環境のアセスメントと対応・調整 (5) 社会資源の活用・調整 6) 終末期にある療養者 <ol style="list-style-type: none"> (1) 死のとりえ方の多様性 (2) エンド・オブ・ライフケア (3) 在宅における看取り 	保坂 明美

		<ul style="list-style-type: none"> ①症状マネジメント ②緩和ケア ③死亡時の対応 ④家族への援助 ⑤社会資源の活用・調整 <p>7) 演習</p> <p>(1) 目的 「1)～6)の事例を用いてGWを行い社会資源の調整と関係職種との連携・協働について考える」</p> <p>(2) 演習方法 事例紹介－個人ワーク－GW－発表－まとめ－事後レポート</p> <p>(3) GWの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ①健康の段階に応じたアセスメント ②社会資源の活用・調整 	
<p>2. 在宅療養者の健康障害に応じた看護</p>	<p>10</p>	<p>1. 健康障害を持ちながら生活する療養者への看護</p> <p>1) 小児の療養者</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 在宅療養継続のための健康危機管理 (2) 自立支援とQOLの維持・向上 (3) 在宅療養継続のための家族への支援 <p>2) 認知症療養者</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 在宅療養継続のための健康危機管理 (2) 自立支援とQOLの維持・向上 (3) 在宅療養継続のための家族への支援 <p>3) 精神障害をもつ療養者</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 在宅療養継続のための健康危機管理 (2) 自立支援とQOLの維持・向上 (3) 在宅療養継続のための家族への支援 <p>4) 難病の療養者</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 在宅療養継続のための健康危機管理 (2) 自立支援とQOLの維持・向上 (3) 在宅療養継続のための家族への支援 <p>5) 演習</p> <p>(1) 目的 「1)～4)の事例を用いてGWを行い訪問看護の目的について考える」</p> <p>(2) 演習方法 事例紹介－個人ワーク－GW－発表</p>	

		<p>－まとめ－事後レポート</p> <p>(3) GWの視点</p> <p>①在宅療養継続のための健康危機管理</p> <p>②自立支援とQOLの維持・向上</p> <p>③在宅療養継続のための家族支援</p>	
3. 訪問看護における臨床判断	9	<p>1. 訪問看護における臨床判断</p> <p>2. 訪問看護の記録</p> <p>1) 訪問看護記録の意義</p> <p>2) 訪問看護で使用する記録</p> <p>3) 訪問看護記録を記入するときの留意点</p> <p>3. 紙上事例演習</p> <p>1) 事例</p> <p>「60歳代後半、すい臓がん、終末期、要介護2」</p> <p>2) 演習方法</p> <p>(1) 個人ワーク－GW－発表－まとめ－事後レポート</p> <p>3) 個人ワーク：アセスメントの視点</p> <p>(1) 家族の生活状況から在宅療養を可能にするための必要条件の何が不足しているか</p> <p>(2) 多職種との連携・協働</p> <p>(3) 継続看護</p> <p>4) GW・発表（ロールプレイ）</p> <p>(1) 対象特性および生活体の必要条件を整理する</p> <p>(2) (1)をもとに、施設の看護の方向性について確認する</p> <p>(3) 提示された場面について、臨床判断し、対象にとってより良い看護を実践する</p>	山下直美 (実務経験教員)
評価	筆記試験 1時間 (90%) 臨床判断演習 (10%) を総合評価する		
教科書	<p>・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論 (1) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論 (2) 地域・在宅看護の基礎 川原 加代子 他 (医学書院)</p>		
参考書			

専門分野 成人看護学

科目名	単位数	開講期	
成人看護学 I	1 単位 15 時間	1 年次後期	
<p><目 的> 成人期にある対象とその家族の生命力をアセスメント（生きる力・生活する力・人と関わる力・支える力）し、生命力の消耗を最小にするよう患者の持てる力を働かせて生活過程を整えられる能力を養う。 そこで、成人期の発達段階・発達課題・生活する力を理解し、健康の保持・増進・疾病の予防、健康障害から回復するための成人看護の基盤となる概念を学ぶ。</p> <p><目 標> 1. 成人期の特徴（身体面・心理面・社会面・生活面）を理解する 2. 成人期における健康問題を生活と関連させて理解する 3. 成人期の健康の保持・増進・疾病予防のための看護活動を理解する 4. 成人期にある対象を看護するための基本的な考え方を理解する</p>			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 成人期の特徴	4	1. ライフサイクルからみた成人期の特徴（第2の人生） 1) ライフサイクルにおける人間のつくり方と各時期の生活する力（持てる力） 2) 成人期の発達段階の特徴 (1) 身体面 (2) 心理面 (3) 社会面 (4) 生活状況の特徴（家族形態と機能・生活様式・社会状況の変化） 3) 成人期の発達課題	浅野 智子 (実務経験教員)
2. 成人の生活と健康問題	4	1. 成人の生活と健康問題 1) 健康指標にみる成人の特徴 (1) 人口動態 (2) 生と死の動向 (3) 受療状況など 2) 生活の中にみる成人の特徴 (1) 生活習慣病（食習慣・運動習慣・喫煙・飲酒） (2) 自殺・職業性疾病・作業関連疾患 (3) 心の病（ストレスに関連する健康課題）	
3. 成人の保健・医療・福祉	4	1. 成人の保健・医療・福祉 [学習の視点] 社会政策の歴史的背景と関連させて学ぶ。 また、保健活動と法的根拠を関連させて学ぶ。 1) ヘルスプロモーション 2) 保健・医療・福祉に関わる施策の概要 3) 保健に関わる対策 4) 医療に関わる対策 5) 福祉に関わる対策	

		6) 保健・医療・福祉の連携	
4. 成人期にある対象を看護するための基本的な考え方	2	1. 成人期の生活する力（持てる力）を働かせる支援 1) 人間関係の構築 2) 患者・家族の意思決定を支える 3) 健康の危機状況への適応 4) 成人期における健康学習支援	
評価	筆記試験 1時間		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会) ・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 成人看護学〔1〕成人看護学総論 小松 浩子 他 (医学書院) 		
参考書			

専門分野 成人看護学

科目名	単位数	開講期	
成人看護学Ⅲ	1 単位 30 時間	2 年次前期	
<p><目 的> 生活機能を維持する働きに障害をもつ成人期にある対象と家族に対し、健康障害・健康の段階に応じた看護について学ぶ。これらを学び、成人期にある対象とその家族の生命力をアセスメント（生きる力・生活する力・人と関わる力・支える力）し、生命力の消耗を最小にするよう、患者の持てる力を働かせて生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生命を維持する働きに障害をもつ成人期にある患者と家族に、必要な看護を理解する 2. 対象の健康障害と健康の段階に応じた状態観察を実施できる 3. 成人期にある“生命を維持する働きに障害”をもつ対象の看護過程の展開方法を、理解する（急性期） 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 呼吸を維持する働きに障害をもつ患者の看護	10	<p>[学習の視点] ライフサイクルにおける健康障害の現れより、「毒され群」「相互影響群」「衰え群」について、成人期の特性を理解し、看護の方向性を考えながら学習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 呼吸を維持する働きに障害をもつ患者の看護 <ol style="list-style-type: none"> 1) 患者の特徴 2) 看護師の役割 3) 経過別看護 4) 症状に対する看護 <ol style="list-style-type: none"> (1) 咳嗽・喀痰 (2) 血痰・喀血 (3) 胸痛 (4) 呼吸困難 5) 検査を受ける患者の看護 <ol style="list-style-type: none"> (1) 動脈ガス分析 (2) 呼吸機能検査 (3) 気管支鏡検査 (4) 胸腔穿刺 (5) 肺生検 6) 治療を受ける患者の看護 <ol style="list-style-type: none"> (1) 酸素療法 (2) 人工呼吸療法 (3) 肺切除術 (4) 胸腔ドレナージ (5) 吸入による薬物療法 7) 代表的な疾患の看護 <ol style="list-style-type: none"> (1) 肺がん (2) 肺炎 (3) 慢性閉塞性肺疾患 (4) 気管支喘息 2. 演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 事例 「壮年期、肺炎、急性期」 	佐々木 歩 人

		2) 演習方法 (1) 患者の状態観察の実施 事例をもとに状態観察の援助計画を立案し実施する (2) 課題学習 (個人・GW) - 技術演習 - まとめ (アセスメントを含む)	
2. 循環を維持する働きに障害をもつ患者の看護	9	1. 循環を維持する働きに障害をもつ患者の看護 1) 患者の特徴 2) 看護師の役割 3) 経過別看護 4) 症状に対する看護 (1) 胸痛 (2) 動悸 (3) 浮腫 (4) 呼吸困難 (5) チアノーゼ (6) 失神 (7) 四肢の疼痛 5) 検査を受ける患者の看護 (1) 心電図 (2) 心血管超音波 (3) 血管造影 (4) 心臓カテーテル 6) 治療を受ける患者の看護 (1) 経皮的冠動脈形成術 (2) 冠動脈バイパス術 (3) 弁置換術・弁形成術 (4) 大動脈バルーンパンピング (5) ペースメーカー (6) 植込み型除細動器 (7) 血栓溶解療法・血栓除去術 7) 代表的な疾患の看護 (1) 心不全 (2) 虚血性心疾患 (3) 弁膜症 (4) 不整脈 (5) 閉塞性動脈硬化症	久保田 淑 貴
3. 看護過程の展開	10	1. 紙上事例演習 1) 事例 「向老期、心筋梗塞、急性期」 2) 演習方法 (1) 科学的看護論のモデルを活用 (2) 個人ワーク - GW - 発表 - まとめ - 事後レポート	浅野 智子 (実務経験教員)
評 価	筆記試験 1時間 (90%) 看護過程演習 (10%) を総合評価する		
教科書	・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 成人看護学〔1〕成人看護学総論 小松 浩子 他 (医学書院) ・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 成人看護学〔2〕呼吸器 浅野 浩一郎 他 (医学書院)		

	<ul style="list-style-type: none">・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 成人看護学〔3〕循環器 吉田 俊子 他 (医学書院)
参考書	<ul style="list-style-type: none">・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会)・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社)

専門分野 老年看護学

科目名	単位数	開講期	
老年看護学 I	1 単位 30 時間	2 年次前期	
<p><目 的></p> <p>老年期にある対象の加齢に伴う身体的・心理的・社会的特徴と、高齢者を支える保健医療福祉の動向を学び、高齢者の健康と生活について理解する。そして、老年看護の倫理と看護の基本について学ぶ。この学びから、高齢者が生きがいを持ち、その人らしく健康的な生活を送ることを支援するために必要な看護の視点と姿勢を養う。また、成人期にある学生が、老年看護の対象である高齢者を、知りたい・知ろうとする関心につなげる。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 老年期にある対象の加齢による変化と生活の特徴を理解する 2. 高齢者に関する保健医療福祉の現状と課題を理解する 3. 老年看護の特性（機能と役割）を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 老年看護の対象である高齢者の特徴	14	<ol style="list-style-type: none"> 1. 老年看護の対象 2. 高齢者の特徴 〔学習の視点〕 『発達心理学』で学んだ老年期の発達課題について復習して授業に臨むこと。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 老年期の発達と変化 <ol style="list-style-type: none"> (1) ライフサイクルにおける老年期（第3の人生）の人間のつくり方と生活する力（持てる力） (2) 発達課題 <ol style="list-style-type: none"> ①ペックによる老年期の心理的危機 (3) 加齢と老化 <ol style="list-style-type: none"> ①加齢に伴う身体的変化 <ol style="list-style-type: none"> ア. 恒常性と4つ力 イ. 高齢者の疾患の特徴 ②加齢に伴う心理的・社会的変化 <ol style="list-style-type: none"> ア. 知能・人格・創造性 イ. 役割と社会活動の変化 ウ. 住宅環境・就労、雇用・収入、生計 2) 老いへの適応 <ol style="list-style-type: none"> (1) 喪失体験と獲得体験 (2) サクセスフルエイジング (3) スピリチュアルティ (4) 余暇活動と生きがい 3. 演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 目的 「高齢者疑似体験」 2) 事例 「80代、女性、2階建ての一戸建てに住所。主な健康障害はない。」 3) 演習方法 	永 洞 文 子 (実務経験教員)

		<p>(1) 事例紹介ーロールプレイーGWー発表ーまとめー事後レポート</p> <p>(2) GWの視点</p> <p>①日常生活における身体的な不自由さと危険について意見交換をする</p> <p>②それに伴う心理・社会的側面への影響を考える</p> <p>③①②の結果を2-1) 老年期の発達と変化、2-2) 老いへの適応の学習と関連づける</p> <p>4. 高齢者の生活</p> <p>1) 高齢者のライフストーリー (生活史)</p> <p>2) 演習</p> <p>(1) 目的</p> <p>「前期・後期高齢者の時代背景を知る」</p> <p>(2) 演習方法</p> <p>①個人ワークーGWー発表ーまとめー事後レポート</p> <p>②GWの視点</p> <p>ア. 生きてきた時代背景</p> <p>イ. 生活リズムと生活習慣、生活様式</p> <p>ウ. アイと自分たちの背景を比較して、高齢者に対する印象について話し合う</p> <p>3) 高齢者のその人らしい生活の継続</p> <p>(1) 治療・介護の必要度と生活の場</p> <p>(2) 多様な生活の場とリロケーション</p> <p>(3) ノーマライゼーション</p>	
<p>2. 高齢者を支える保健医療福祉の動向</p>	<p>7</p>	<p>1. 高齢社会の現状</p> <p>1) 統計的特徴</p> <p>2) 高齢化の要因</p> <p>3) 高齢社会の伴う課題</p> <p>4) 高齢者と家族の変化</p> <p>2. 高齢者を支える保健医療福祉制度</p> <p>1) 医療保険制度</p> <p>2) 介護保険制度</p> <p>3) 地域包括ケアシステム</p>	
<p>3. 老年看護の特性</p>	<p>8</p>	<p>1. 老年看護の倫理</p> <p>1) 高齢者差別の防止 (エイジズム)</p> <p>2) 高齢者虐待の防止</p> <p>3) 高齢者の権利擁護</p> <p>(1) 安全確保と身体拘束</p> <p>(2) 認知症高齢者の権利擁護</p> <p>(3) 高齢者の意思決定への支援</p> <p>(4) セーフティマネジメント</p>	

		<p>①寛ぎ・安心・安全</p> <p>2. 老年看護活動の特性</p> <p>1) 意思決定</p> <p>2) 理論・概念の活用</p> <p>3) 健康の保持増進と予防</p> <p>4) 高齢者のリスクマネジメント (医療安全・救命救急・災害看護)</p> <p>5) 家族との協働</p>	
評価	筆記試験 1時間		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護学 北川 公子 他 (医学書院) ・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護 病態・疾患論 鳥羽 研二 他 (医学書院) 		
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社) ・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社) ・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会) 		

専門分野 小児看護学

科目名	単位数	開講期	
小児看護学 I	1 単位 30 時間	2 年次前期	
<p><目 的></p> <p>小児看護の概念および小児を取り巻く環境の変化を理解し、小児看護の対象と看護の特性について学ぶ。また、小児とその家族が健全に成長発達を促進するための看護と健康増進のための看護を学ぶ。</p> <p>この学びから、「人間が、よく生まれ、よく育まれ、よく働かせる」ようにつくられていることを意識し、どの時代であっても小児とその家族が健やかな成長発達と健康の増進が図れるように、対象の持てる力を働かせ生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 小児看護の対象と看護の特性を理解する 2. 小児を取り巻く環境と保健の動向（法・施策）について理解する 3. 小児の成長発達過程と発達課題を理解する 4. 小児各期の日常生活援助と生活指導について理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 小児看護の対象と看護の特性	2	<p>[学習の視点]</p> <p>「人間が、よく生まれ、よく育まれ、よく働かせる」ようにつくられていることについて、意識して学ぶ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ライフサイクルにおける小児期の人間のつくり方と生活する力（持てる力） 2. 小児看護の基盤となる概念 <ol style="list-style-type: none"> 1) 小児とは 2) 小児看護の対象とは 3) 小児看護の目標と役割 4) 小児看護の場と職種 5) 小児看護における倫理（子どもの権利） 6) 小児看護における課題 	佐藤 典加 (実務経験教員)
2. 小児を取り巻く環境と保健の動向	6	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小児看護を取り巻く環境と保健の動向 <ol style="list-style-type: none"> 1) 小児諸統計からみた子どもと家族の健康問題 <ol style="list-style-type: none"> (1) 人口動態と出生率 (2) 出生と母親の年齢・世帯構造 (3) 子どもの死亡（周産期死亡・乳児死亡など） 2) 小児看護に関する法律と制度 <ol style="list-style-type: none"> (1) 児童福祉法 (2) 母子保健対策 (3) 学校保健対策 (4) 医療費支援 (5) 予防接種 (6) 特別支援養育 (7) 臓器移植法など 3) 小児看護の対象を取り巻く環境 	

		<ul style="list-style-type: none"> (1) 家族構造と機能の変化 (2) 虐待・育児放棄 (3) 健康問題 (4) いじめ・不登校 (5) 発達障害児に対する理解 (6) 小児医療の現状と課題 	
3. 小児の各期における成長発達と看護	8	<ul style="list-style-type: none"> 1. 小児の成長発達と看護 <ul style="list-style-type: none"> 1) 小児の成長発達の原則と影響因子 <ul style="list-style-type: none"> (1) 成長発達の概念・原則・影響因子 (2) 発達課題と発達理論 2) 小児の成長発達のアセスメント <ul style="list-style-type: none"> (1) 形態的成長・機能的発達の評価 (2) 身体発育の評価 (3) 発達検査 (4) 心理・社会的発達の評価 (5) 療育環境 3) 小児期における成長発達の特徴と看護 <ul style="list-style-type: none"> (1) 神経系 (2) 運動系 (3) 感覚器系 (4) 循環器系 (5) 免疫系 (6) 呼吸器系 (7) 消化器系 (8) 代謝系 (9) 泌尿器系 (10) 体温調節 (11) 大泉門・小泉門・生歯 (12) 認知・思考・コミュニケーション・言語 (13) 情緒・アタッチメント・分離不安 (14) 社会性・道徳性 	
4. 成長発達に応じた生活の支援	13	<ul style="list-style-type: none"> 1. 成長発達に応じた生活の支援 <ul style="list-style-type: none"> 1) 新生児期 <ul style="list-style-type: none"> (1) 栄養と授乳 (2) 事故防止 (3) 親子関係の確立 (4) 家族の育児技術の獲得 (5) コミュニケーション 2) 乳児期 <ul style="list-style-type: none"> (1) 栄養と離乳 (2) 運動と遊び (3) 感染予防と予防接種 (4) 事故防止 (5) 親子関係の確立 (6) 家族の育児技術の獲得 (7) コミュニケーション 	

		<p>3) 幼児期</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 食生活と食育 (2) 運動と遊び (3) 生活リズムの確立 (4) 基本的な生活習慣の確立 (5) 感染予防と予防接種 (6) 事故防止と安全教育 (7) 親子関係の確立 (8) 社会化 (9) 育児技術の獲得 (10) コミュニケーション <p>4) 学童期</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 肥満や食習慣の乱れ (2) う歯の予防 (3) 近視の予防 (4) スポーツ外傷の予防 (5) 学校感染症の予防 (6) 生活習慣病の予防 (7) 学習と遊び (8) 事故防止と安全教育 (9) セルフケアと保健教育 (10) 食生活と食育 (11) 仲間との関係や学校への適応 (12) コミュニケーション <p>5) 思春期</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 体格と体力 (2) 第二性徴 (3) アイデンティティの確立 (4) 情緒的変化と家族関係 (5) 仲間との関係 (6) 性意識の変化と逸脱行動 (7) 異性への関心 (8) ライフスタイルと生活リズムの変化 (9) 喫煙・飲酒の防止 (10) 不登校の実体と支援 (11) いじめ・校内暴力の防止 (12) 自殺の防止 (13) コミュニケーション <p>6) 演習</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 目的 <ul style="list-style-type: none"> 「発達段階による生活の支援の違いについて学ぶ」 (2) 演習方法 <ul style="list-style-type: none"> ①個人ワークーGWーロールプレイー発表ーまとめー事後レポート (3) GWの視点 <ul style="list-style-type: none"> ①栄養・事故防止・遊びと学習・コミュニケーションについて、発達段階による特徴を理解する ②健やかに成長をするための生活の 	
--	--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

		支援について計画立案し実践する	
評 価	筆記試験 1時間		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学〔1〕小児看護学概論 小児臨床看護総論 奈良間 美 保 他 (医学書院) 		
参考書	<ul style="list-style-type: none"> ・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄 井 坦 子 (講談社) ・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄 井 坦 子 (講談社) 		

専門分野 小児看護学

科目名	単位数	開講期	
小児看護学Ⅲ	1 単位 15 時間	2 年次後期	
<p><目 的> 病気や入院・診察（検査・処置）が小児と家族に与える影響とその看護を学ぶ。 この学びから、「人間が、よく生まれ、よく育まれ、よく働かせる」ようにつくられていることを意識し、小児とその家族の健康障害や入院治療による影響を最小にし、健やかな成長発達と健康の増進が図れるように、対象の持てる力を働かせ生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康障害や診察（検査・処置）・治療・入院が小児と家族に与える影響を理解する 2. 診察（検査・処置）・治療を安全安楽に安心して受けられるための根拠となる知識を理解する 3. 診察・検査・治療・処置を安全安楽に安心して受けられる知識・技術を理解する 4. 健康障害をもつ小児の日常生活援助技術を安全安楽に実施できる 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 健康障害や診察（検査・処置）・治療・入院が小児と家族に与える影響と看護	2	1. 健康障害や診察・入院が小児と家族に与える影響と看護 1) 健康障害に対する小児の理解と説明 (1) 健康障害に対する小児の理解の特徴 (2) 小児の理解に関する要因 (3) 発達に応じた病気の説明 (4) インフォームドアセント 2) プレパレーションとは 3) 病気や診察・入院が小児に与える影響と看護 (1) 成長発達に及ぼす影響 (2) 健康障害や診察・入院に伴うストレスと影響要因 (3) 小児の反応とストレス対処行動 4) 小児の健康障害や診察・入院がきょうだい・家族に及ぼす影響と看護 5) 痛みを表現している小児と家族への看護 6) 活動制限が必要な小児と家族への看護 7) 感染対策上隔離が必要な小児と家族への看護 8) 外来における小児と家族への看護	土 場 望由紀
2. 診察（検査・処置）・治療を受ける小児と家族への看護	6	[学習の視点] 小児看護では、「基礎看護技術」で学んだ原理原則を基に、発達段階や健康障害・健康の段階に応じた援助技術を学ぶ。事前に課題を学習して演習に臨むこと。 1. 診察（検査・処置）を受ける小児と家族への看護	

		<p>1) 診察・治療に伴うコミュニケーション技術</p> <p>(1) 心理的準備 (プレパレーションの実際)</p> <p>(2) 検査・処置・治療に伴う苦痛に対する支援 (ディストラクション)</p> <p>2) 診察 (検査・処置) に伴う看護</p> <p>(1) 状態観察 (バイタルサイン測定)</p> <p>(2) 身体計測</p> <p>(3) 採血</p> <p>(4) 採尿</p> <p>(5) 骨髄穿刺</p> <p>(6) 腰椎穿刺</p> <p>3) 治療に伴う看護</p> <p>(1) 与薬</p> <p>(2) 注射</p> <p>(3) 輸液療法</p> <p>(4) 吸引</p> <p>(5) 吸入</p> <p>(6) 酸素療法</p> <p>(7) 経管栄養</p> <p>2. 演習</p> <p>1) 事例</p> <p>「生後6か月の女児、昨夜から発熱と咳嗽、喘鳴があり、病院を受診した。診察にて、気管支喘息と診断され、本日、入院となる。医師の指示により、点滴静脈内注射と吸入をすることになった。」</p> <p>2) 技術項目</p> <p>(1) プレパレーション</p> <p>(2) ディストラクション</p> <p>(3) 状態観察 (バイタルサイン測定)</p> <p>(4) 輸液療法 (点滴静脈内注射の介助)</p> <p>(5) 吸入</p>	
<p>3. 健康障害をもつ小児の日常生活援助技術</p>	<p>6</p>	<p>〔学習の視点〕</p> <p>小児看護では、「基礎看護技術」で学んだ原理原則を基に、発達段階や健康障害・健康の段階に応じた援助技術を学ぶ。事前に課題を学習して演習に臨むこと。</p> <p>1. 日常生活援助技術</p> <p>1) 食事の援助技術</p> <p>(1) 調乳、哺乳と排気・離乳食介助</p> <p>2) 清潔・衣生活の援助技術</p> <p>(1) 沐浴・入浴</p> <p>(2) 清拭・陰部洗浄・臀部浴</p> <p>(3) うがい・歯磨き</p>	<p>佐藤 典加 (実務経験教員)</p>

		<p>(4) 衣類の交換</p> <p>3) 排泄の援助技術</p> <p>(1) オムツ交換</p> <p>(2) 浣腸</p> <p>4) 呼吸の援助技術</p> <p>(1) 体位の工夫 (体位交換・体位ドレナージ)・スクイーピング</p> <p>5) 移動の援助技術</p> <p>(1) 乳児の抱き方</p> <p>(2) 車椅子・ストレッチャーでの移乗と移送</p> <p>6) 環境整備の技術</p> <p>(1) ベッドメイキング</p> <p>(2) 転倒・転落・外傷予防</p> <p>2. 演習</p> <p>1) 事例</p> <p>「生後6か月の女児、3日前に発熱と咳嗽、喘鳴があり病院を受診した。診察にて、気管支喘息と診断され、即日、入院となる。薬物療法を受け、状態が回復し、明日、退院することが決まった。」</p> <p>2) 技術項目</p> <p>(1) 調乳、哺乳と排気・離乳食介助</p> <p>(2) 清拭・臀部浴</p> <p>(3) オムツ交換</p> <p>(4) 乳児の抱き方・体位の工夫</p> <p>(5) 環境整備</p>	
<p>評価</p>	<p>筆記試験 1時間</p>		
<p>教科書</p>	<p>・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学〔1〕小児看護学概論 小児臨床看護総論 奈良間 美 保 他 (医学書院)</p> <p>・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学〔2〕小児臨床各論 奈良間 美 保 他 (医学書院)</p>		
<p>参考書</p>	<p>・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社)</p> <p>・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社)</p>		

専門分野 小児看護学

科目名	単位数	開講期	
小児看護学Ⅳ	1 単位 30 時間	3 年次前期	
<p><目 的></p> <p>さまざまな健康の段階にある小児とその家族の看護についてと、小児看護における看護過程の展開方法を学ぶ。</p> <p>そこで、小児期にある対象とその家族の生命力をアセスメント（生きる力・生活する力・人と関わる力・支える力）し、小児とその家族が健康障害や入院治療による影響を最小限にし、健やかな成長発達と健康の回復に向けて、対象の持てる力を働かせ生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. さまざまな健康の段階にある小児とその家族の特徴を理解する 2. さまざまな健康の段階にある小児とその家族に必要な看護を理解する 3. 健康障害をもつ小児と家族の経過別の看護過程の展開方法を、理解する（急性期） 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 急性期にある小児と家族への看護	8	<p>〔学習の視点〕</p> <p>小児看護における経過別看護は、成人看護学で学習した経過別看護を土台にして学ぶ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 急性期にある小児と家族の看護 <ol style="list-style-type: none"> 1) 急性症状のある小児と家族への看護 <ol style="list-style-type: none"> (1) 急性的な経過をたどる疾患の特徴と治療 (2) 急性期の小児と家族の特徴と看護 (3) フィジカルアセスメントと看護 <ol style="list-style-type: none"> ①発熱 ②脱水 ③下痢・嘔吐 ④呼吸困難 ⑤けいれん 2) 救急救命処置が必要な小児と家族への看護 <ol style="list-style-type: none"> (1) 小児のトリアージ (2) フィジカルアセスメントと看護 <ol style="list-style-type: none"> ①小児の意識レベル ②小児の一次救命処置 (3) 主な事故と処置 <ol style="list-style-type: none"> ①誤飲物質と処置 ②溺水と処置 ③熱傷の特徴と重症度および処置 3) 周手術期における小児と家族への看護 <ol style="list-style-type: none"> (1) 小児の手術の特徴 <ol style="list-style-type: none"> ①手術を要する健康障害と手術の時期 手術の適応：緊急手術・計画手術 ②手術を受ける小児と家族の反応と看護 ③術前・術中・術後の看護 プレパレーション・身体状態のアセスメント・安全安楽 4) 出生直後から集中治療が必要な小児と 	奥田 ゆかり

		<p>家族への看護 〔学習の視点〕 母性看護学で学ぶ新生児の異常と看護と関連づけて学習する。ここでは集中治療における援助と親子・家族関係確立への支援について学ぶ。</p> <p>(1) 集中治療における援助 (NICU) (2) 親子・家族関係確立への支援 5) 退院に向けての援助 (多職種連携・在宅看護)</p>	
2. 慢性期にある小児と家族への看護	13	<p>1. 慢性期にある小児と家族への看護</p> <p>1) 慢性疾患をもつ小児と家族の看護</p> <p>(1) 慢性的な経過をたどる疾患の特徴と治療 (2) 小児慢性特定疾患治療研究事業 (3) 疾患による小児と家族の生活 (4) 学習支援・復学支援 (5) 発達に応じたセルフケア能力の獲得のための養育と家族への支援 (6) 継続看護と多職種連携 (在宅療養)</p> <p>2) 先天性疾患のある小児と家族の看護</p> <p>(1) 先天性異常の種類と特徴 (2) 小児の発達段階に応じた援助 (3) 小児の疾患に対する家族の心理と受容 (4) 養育とケア技術獲得に関する家族の援助 (5) 継続看護と多職種連携 (在宅療養)</p> <p>3) 医療的ケアを必要として退院する小児と家族への看護</p> <p>(1) 入院生活から在宅への移行に向けた支援 (2) 継続看護と多職種連携と社会資源の活用 (3) 在宅療養中の小児と家族への支援 (4) 小児のセルフケア行動の促進</p>	寺田 睦美
3. 終末期にある小児と家族への看護		<p>1. 終末期にある小児と家族への看護</p> <p>1) 小児の死の理解と看護</p> <p>(1) 小児の死の概念 (2) 死に対する小児の反応と看護</p> <p>2) 終末期にある小児と家族への緩和ケア</p> <p>(1) 終末期にある小児の心身状態と緩和ケア (2) 小児の死を看取る家族の反応と看護</p>	

4. 看護過程の展開	8	1. 紙上事例演習 1) 事例 「学童期、気管支喘息、急性期」 2) 演習方法 (1) 科学的看護論のモデルを活用 (2) 個人ワークーGWー発表ーまとめー事後レポート	佐藤 典加 (実務経験教員)
評価	筆記試験 1時間 (90%) 看護過程演習 (10%) を総合評価する		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学〔1〕小児看護学概論 小児臨床看護総論 奈良間 美保 他 (医学書院) ・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学〔2〕小児臨床各論 奈良間 美保 他 (医学書院) 		
参考書			

専門分野 母性看護学

科目名		単位数	開講期
母性看護学Ⅲ		1 単位 30 時間	3 年次前期
<p><目 的></p> <p>褥婦および新生児とその家族の特性を理解し、産褥期の健康を促進し、新生児が環境の変化に適応するために必要な看護を学ぶ。</p> <p>そこで、産褥期にある対象（褥婦と新生児）と家族が、身体機能の回復と進行性変化に適応し、安全で健全な育児環境を整えられるように、対象と家族の持てる力を働かせ生活過程を整えられる能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 正常な産褥期の経過および生理的变化（身体的変化）・心理的变化・社会的変化の特徴を理解する 2. 褥婦の身体機能回復および進行性変化を促進し、母親役割の獲得や家族関係の再構築に必要な援助を理解する 3. 新生児の特徴と生理的变化を理解する 4. 新生児が安全で健康に成長・発達するために必要な援助を理解する 5. 順調な経過をたどる褥婦と新生児の看護過程の展開方法を、理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 産褥期の看護	10	<ol style="list-style-type: none"> 1. 正常な産褥の経過 <ol style="list-style-type: none"> 1) 産褥とは 2) 産褥期の身体的変化 <ol style="list-style-type: none"> (1) 退行性変化 (2) 進行性変化 3) 産褥期の心理・社会的変化 <ol style="list-style-type: none"> (1) 褥婦の心理的变化 <ol style="list-style-type: none"> ①母親への適応過程 ②マタニティブルー ③愛着・絆の形成とこどもの確認 (2) 家族の心理的变化 <ol style="list-style-type: none"> ①父親・きょうだい・祖父母の心理的变化 (3) ソーシャルサポート（社会的支援） 2. 褥婦の健康と生活のアセスメント <ol style="list-style-type: none"> 1) 産褥経過の診断 2) 褥婦の身体・心理・社会・生活面の健康状態のアセスメントの視点 3. 褥婦と家族の看護 <ol style="list-style-type: none"> 1) 産褥復古に関する支援 2) 日常生活とセルフケア 3) 食生活の教育 4) バースレビュー 5) 親子愛着形成への支援 6) 母乳育児への支援 7) 育児技術習得への支援 8) 家族関係の再構築 	笠原 視砂子

<p>2. 新生児期の看護</p>	<p>11</p>	<p>1. 新生児の特徴と生理 〔学習の視点〕 母性看護学では早期新生児（生後7日未満）に焦点をあてて学習する。</p> <p>1) 新生児とは 2) 新生児の形態と機能 ・神経系・運動器系・感覚器系・循環器系・呼吸器系・消化器系・泌尿器系・代謝系・体温調節・生体の防御機能</p> <p>2. 新生児の健康と発育のアセスメント</p> <p>1) 新生児の診断 (1) ハイリスク児の評価・要因 (2) 出生直後の評価（アプガースコア） (3) 発育・奇形の評価 (4) 黄疸・新生児マスキリーニング</p> <p>2) 健康状態のアセスメント (1) 基礎情報（リスク因子・バイタルサイン測定値・計測など） (2) 子宮外生活への適応状態 ①子宮外生活適応過程 ②全身状態（フィジカルアセスメント） ③排泄状態 ④生理的体重減少 ⑤黄疸 ⑥新生児に実施される検査 ⑦哺乳状態 ⑧保育環境</p> <p>3. 新生児の看護 1) 出生直後の看護 2) 出生から退院までの看護 3) 退院後から一か月健診までの看護</p> <p>4. 新生児の看護で使われる看護技術 1) バイタルサイン測定技術 2) 計測技術 3) フィジカルアセスメント 4) 日常生活の援助技術 (1) 沐浴と臍処置 (2) 衣類の着脱 (3) 抱き方 (4) 寝かせ方 (5) オムツ交換と股関節脱臼予防</p> <p>5. 演習 1) 技術項目 (1) 沐浴と臍処置 (2) 衣類の着脱 (3) 抱き方 (4) 寝かせ方</p>	<p>笠原 視砂子 (9) 吉村 英敦 (2)</p>
-------------------	-----------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------

		(5) オムツ交換と股関節脱臼予防	
3. 看護過程の展開	8	<p>1. 産褥期・新生時期にある対象と家族への看護</p> <p>1) 紙上事例演習</p> <p>(1) 事例</p> <p>「正常な経過をたどる褥婦と新生児の事例を用いて看護過程の展開をする」</p> <p>(2) 演習方法</p> <p>①科学的看護論モデルを活用</p> <p>②個人ワーク-GW-発表-まとめ-事後レポート</p> <p>(3) 個人ワーク:アセスメントの視点</p> <p>①産褥期の生理的変化が順調に経過しているか</p> <p>②新生児の生理的変化からの逸脱を予防し、胎外生活へ適応と健康な発達が出来ているか</p> <p>③母子相互作用を意識し、愛着形成過程が順調に進み、母親役割の獲得および家族関係再構成が進んでいるか</p> <p>(4) GW・発表</p> <p>①対象特性および生活体の反応を捉える</p> <p>②対象特性・看護の方向性を一致させる。生活体の反応を付き合わせて看護計画を立案し、経過情報をもとに評価する</p>	佐々木 梓 (実務経験教員)
評価	筆記試験 1時間 (90%) 看護過程演習 (10%) を総合評価する		
教科書	・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 母性看護学〔2〕母性看護学各論 森 恵美 他 (医学書院)		
参考書	<p>・科学的看護論 薄井 坦子 (日本看護協会出版会)</p> <p>・看護のための人間論 ナースが視る人体 薄井 坦子 (講談社)</p> <p>・看護のための疾病論 ナースが視る病気 薄井 坦子 (講談社)</p>		

専門分野 看護の統合と実践

科目名	単位数	開講期	
看護管理	1 単位 30 時間	3 年次前期	
<p><目 的></p> <p>看護管理とは管理者だけではなく、個々のスタッフがそれぞれの立場でさまざまな状況に対応する際に基盤となるものであり、看護であるものと、看護でないものが見極められ、実践できるしくみをつくることを学ぶ。また、国際社会における保健医療の実際を知り、国際協力について学ぶ。さらに、地域包括ケアの時代に必要な多職種との連携・協働についても学ぶ。</p> <p>そこで、より良い看護を提供できる専門職業人であるために、自立した個人として自己のキャリアを主体的に考える姿勢を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護管理の対象と看護管理者の役割、看護組織マネジメントに関する基礎的知識を理解する 2. 看護の国際協力の必要性としくみを理解する 3. 保健医療福祉チームにおける看護師の役割と責任を意識し、対象の課題解決に必要な多職種との連携・協働の実際について理解する 4. 専門職業人として、主体的に学び続けることの意義と重要性を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 看護管理	8	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護管理の基本 <ol style="list-style-type: none"> 1) 組織とマネジメント 2) 看護師の仕事とその管理 3) 看護の質の保証とその管理 4) 看護と経営 2. 看護管理に必要な知識・技術 <ol style="list-style-type: none"> 1) リーダーシップとは、メンバーシップとは 2) リーダーの特性理論 3) リーダーシップスタイル 4) リーダーシップに求められる能力、資質の条件 3. 情報のマネジメント 	柴田 香奈美
	5	<ol style="list-style-type: none"> 4. 看護に関する諸制度と生涯学習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 看護制度の変遷 2) 看護活動と法令、行政組織 3) 看護と専門機関、職能団体 4) 継続教育制度と生涯学習 5. 演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 目的 「看護管理の考え方と実際」 2) 演習方法 個人ワークーGWー発表ーまとめー事後レポート 3) 学習の視点 (1) ナイチンゲールの小管理をもとにして、組織での看護をマネジメントする 	

2. 国際看護	4	<p>1. 看護の国際化と国際看護</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 看護における国際化の状況 2) 国際協力のしくみ 3) 世界の健康問題の現状 4) 国際看護活動の実際 	<p>永 洞 文 子 (実務経験教員)</p>
3. 多職種連携の実際	12	<p>〔学習の視点〕</p> <p>多職種連携に関する基礎知識として、保健医療福祉チームに携わる職種と、その仕事内容について、専門基礎分野・専門分野Ⅰで学んでいる（『基礎看護学』『公衆衛生』『社会保障論Ⅱ』『リハビリテーション概論』）。その知識を活用し、専門分野Ⅱでは、各看護学の特徴に合わせた多職種連携・協働についての知識を学んでいる。さらに、『成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ』『老年看護学実習Ⅰ』では、受け持ち患者の回復過程から、必要な社会資源と職種・調整事項について、現状（現在、関わっている職種と受けている支援）と比較して理解できることをねらいに、実習を積み重ねている。</p> <p>以上の学習を前提に演習を進める。</p> <p>1. 多職種連携演習</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 連携に必要な能力について <ol style="list-style-type: none"> (1) 個々の専門職（看護職）の知識・技術・姿勢 (2) 専門職に共通の知識・技術・姿勢 (3) 全ての専門職に必要な一般的能力（社会人基礎力） 2) 演習の導入（2時間） <ol style="list-style-type: none"> (1) オリエンテーション <ol style="list-style-type: none"> ①演習目標「保健医療福祉チームにおける看護師の役割と責任を意識し、対象の課題解決に必要な多職種との連携・協働の実際について理解する」 ②演習の進め方（演習の成員：看護師・PT・OT） ③事例紹介 <p>「60代、男性、糖尿病の進行により足趾が壊死した。下腿切断のために入院し、現在は慢性期で、内服治療とリハビリテーションを行っている。義足での歩行練習を行いながら、自立へ向かっている。キーパーソンは妻で、二人暮らし。2週間後に自宅退院を控えている。」</p> 	<p>中 井 史 世 (実務経験教員)</p>

		<p>④状況設定 「対象が生命力の消耗を最小にし、生活過程を整えられ、2週間後に自宅退院を迎えられるように、必要な社会資源と調整について検討が必要になった。今後の予定は、明日は看護カンファレンス、3日後に多職種カンファレンスが計画されている。」</p> <p>(2) グループワーク 1: 演習準備 (事前学習)</p> <p>①演習計画書作成</p> <p>②事例に必要な基礎知識の確認と文献検索</p> <p>ア. 事例に必要な看護職としての知識</p> <p>イ. 多職種と仕事内容の確認</p> <p>ウ. 社会資源について</p> <p>3) 演習 (2時間)</p> <p>(1) グループワーク 2: 看護カンファレンス</p> <p><事例検討></p> <p>①課題解決に向けた支援内容</p> <p>ア. 看護職としての支援内容</p> <p>イ. 必要な社会資源と職種、連携・協働内容 (演習の成員は、看護師・PT・OTであるが、必要であれば他の職種と連携・協働内容を挙げること)</p> <p>②課題解決に向けた連携・協働の方法</p> <p>ア. 方法を具体的挙げ援助計画書を作成</p> <p>(2) グループワーク 3 : 多職種カンファレンス (6時間)</p> <p>①各職種における対象の捉え (対象特性)</p> <p>②事例の課題の確認</p> <p>③職種間で必要な社会資源とその根拠・具体策について検討</p> <p>④課題解決に向けて援助計画書の作成</p> <p>⑤グループ発表</p> <p>(3) ロールプレイ</p> <p>①1G選出し、援助計画書をもとにロールプレイを行う</p> <p>②意見交換</p> <p>(4) グループワーク 4 : 看護師カンファレンス (2時間)</p>	
--	--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

		<p>①多職種カンファレンスより、看護職としての役割と責任、調整事項を明確にする</p> <p>②看護計画の立案・修正</p> <p>4) グループワーク5：演習の学び</p> <p>(1) 演習目標に対する振り返り</p> <p>(2) 自己課題</p> <p>5) 演習のまとめ</p>	
評 価	筆記試験 1時間 (60%) 多職種連携演習 (40%) を総合評価する		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・系統看護学講座 統合分野 看護の統合と実践 (1) 看護管理 (1) 上泉和子他 ・系統看護学 看護の統合と実践 (3) 災害看護学・国際看護学 竹下喜久子他 (医学書院) ・看護覚え書ー看護であること看護でないことー 薄井 坦子 他 (現代社) 		
参考書			

専門分野 看護の統合と実践

科目名		単位数	開講期
救急・災害看護		1 単位 30 時間	2 年次前期～後期
<p><目 的></p> <p>救急看護の基本的な目的は、対象の「命を救い、生を支える」ことにある。また、災害看護の対象は人々であり、そのコミュニティで暮らす人々の健康や生活がよりよい状態になるようにケアすることが災害看護の役割である。そのため、救急・災害看護の特徴と役割を理解し、対象の状況に応じた適切な看護を提供するための基礎的知識を学ぶ。</p> <p>この学びから、看護の専門的知識を統合し、救急・災害におけるあらゆる対象の健康障害の特徴から、援助を行うための基本的な能力と医療チームにおける多職種と連携・協働する基礎的能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 救急医療・救急看護の特徴と看護の役割を理解する 2. 救急患者に見られやすい主要病態に対する治療および看護を理解する 3. 災害の定義および災害医療の概要を理解する 4. 災害サイクルにおける保健医療ニーズと活動の場に応じて必要な看護を理解する 5. 災害時（直後）における必要な看護と看護師の責任と役割を理解する（災害看護演習） 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 救急と看護	4	1. 救急看護の基礎 1) 救急看護の定義、体制、看護の場 2) 救急看護の対象	丸山 明日香
2. 救急処置と看護	8	1. 救急患者の観察とアセスメント 1) 学習の視点 (1) 意識障害 (2) 呼吸障害 (3) ショック・循環障害 (4) 急性腹症 (5) 泌尿器・生殖器障害 (6) 体液・代謝異常への対応 (7) 体温異常 (8) 外傷 (9) 熱傷 (10) 中毒 (11) 溺水 (12) 刺咬症 (13) 精神症状 (14) 脳死状態 2. 主要病態に対する治療と看護技術 1) 心肺停止状態への対応（一次・二次救命処置） 2) 各定義の救急処置と看護 3. 演習 「心肺蘇生法・AED」	湯瀬 奈祐

<p>3. 災害と看護</p>	<p>4</p>	<p>1. 災害医療の基礎</p> <p>1) 災害の定義、種類と特徴</p> <p>2) 災害の歴史と法制度</p> <p>3) 災害の情報伝達体制、災害に対する社会の対応</p> <p>4) 災害サイクルと保健医療体制</p>	<p>中村 洋美</p>
<p>4. 災害各期の看護</p>	<p>8</p>	<p>1. 災害医療の特徴と看護活動</p> <p>1) 災害各期の特徴 (超急性期・急性期・慢性期・静穏期)</p> <p>2) 災害看護の役割</p> <p>3) 災害看護の活動の場</p> <p>2. 災害時の看護</p> <p>1) 地域アセスメント</p> <p>2) 災害が人々の生活に及ぼす影響と健康問題</p> <p>3. 被災者の特性に応じた災害看護</p> <p>4. 被災者、救護者のストレスと心のケア</p> <p>5. 初期から中長期的な健康問題と看護</p> <p>1) 避難所における人々の看護</p> <p>2) 仮設住宅での看護</p> <p>3) 自宅避難者の看護</p> <p>6. 減災・防災マネジメント</p> <p>7. 演習</p> <p>1) 目的 「各ライフサイクルにおける特徴的な看護」</p> <p>2) 演習方法 個人ワークーGWー発表ーまとめ</p> <p>3) 学習の視点</p> <p>(1) 要配慮者、小児・母性、高齢者、障害者、継続治療が必要な患者、外国人、遺族への看護</p> <p>(2) 災害における保健医療の役割</p>	
	<p>5</p>	<p>8. 災害看護の実際(災害看護演習)</p> <p>『函館空港消火救難救急医療総合訓練』に、負傷者役で参加し、トリアージや救護の実際、多職種連携について、体験および見学をする。そこから、災害直後における必要な看護と看護師の責任と役割を理解する。</p> <p>1) 訓練の導入</p> <p>(1) 演習目標</p> <p>(2) 演習の進め方</p> <p>①設定：航空機事故による火災等</p> <p>②訓練の流れ</p> <p>航空機からの脱出→トリアージ区域へ搬送または独歩で移動→トリアージ→病態別に救護室で必要な処置を受ける</p>	<p>本間 かほり (実務経験教員)</p>

		<p>(3) 学生の役割</p> <p>①重傷・中等傷・軽傷の傷病者</p> <p>(4) 事前グループワーク</p> <p>2) 訓練に参加 決められた傷病者になり、訓練の流れに沿って演じる</p> <p>3) 事後グループワーク 演習目標に沿って、訓練の実際から、意見交換を行い、学びを整理する。</p> <p>4) 演習のまとめ</p>	
評価	筆記試験 1時間 レポート課題を総合評価する		
教科書	<p>・系統看護学 別巻 救急看護学 山勢 博彰 他 (医学書院)</p> <p>・系統看護学 看護の統合と実践 (3) 災害看護学・国際看護学 竹下喜久子他 (医学書院)</p>		
参考書			

専門分野 看護の統合と実践

科目名	単位数	開講期	
家族看護論	1 単位 15 時間	3 年前期	
<p><目 的></p> <p>個人の健康状態は、両親の健康状態や暮らし方やその地域の健康を守る社会的システムに影響される。また、24時間の生活をとおして定まっていくため、個人の健康を守るために家族全体を看護の対象として捉える必要がある。そして、対象の持てる力を働かせて、家族とともに対象がその人らしく生きるための看護について学ぶ。</p> <p>そこで、家族社会学で学習した家族の動向、家族関係、家族理解の諸理論の知識を前提に、家族の健康の保持増進、健康問題を解決するための予防的・支持的・治療的な看護実践能力を養う。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 家族構成員の健康が家族全体に影響を及ぼすため、家族を一つの単位として看護する必要性を理解する 2. 家族看護における看護の役割を理解する 3. 家族が健康に生活するために必要な支援を理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 家族看護の基礎	6	<ol style="list-style-type: none"> 1. 家族看護とは <ol style="list-style-type: none"> 1) 家族看護の定義 2) 家族看護の目的と看護の役割 3) 家族看護の発展と動向 2. 家族看護における対象理解 <ol style="list-style-type: none"> 1) 家族の発達段階 2) 家族システム 3) 家族看護からみた家族 <ol style="list-style-type: none"> (1) ジェノグラム (2) エコマップ 4) 看護の対象としての家族のとらえ方 <ol style="list-style-type: none"> (1) 家族の機能・ライフステージと健康問題の特性 (2) 家族の疾病による役割と生活の変化 5) 家族像の形成 <ol style="list-style-type: none"> (1) 家族を理解する場・情報 (2) 家族の多様性 3. 家族を取り巻く社会的・文化的背景 <ol style="list-style-type: none"> 1) 家族の動向 2) 家族と地域社会 	山下 直美 (実務経験教員)
2. 家族看護の実践	8	<ol style="list-style-type: none"> 1. 家族看護における看護の役割 <ol style="list-style-type: none"> 1) 家族看護における看護の特徴 <ol style="list-style-type: none"> (1) 情報収集とアセスメントの方法 (2) 家族アセスメントと介入 2) 健康問題に応じた家族への支援 <ol style="list-style-type: none"> (1) 患者の背景としての家族アプローチ (2) 1つのシステムとしてのアプローチ 	

		<p>2. 演習</p> <p>1) 目的 「対象とその家族が健康でその人らしい生活を送るための退院調整について考える」</p> <p>2) 事例 「80歳、女性、アルツハイマー型認知症、高血圧」</p> <p>3) 演習方法 事例紹介－個人ワーク－GW－発表－まとめ－事後レポート</p> <p>4) GWの視点 (1) 家族アセスメントと判断 (2) 健康問題に応じた家族への支援 (3) (1)(2)の個人ワークをもとに、意見交換を行い家族支援の方法を考える</p>	
<p>評価</p>	<p>筆記試験 1時間</p>		
<p>教科書</p>	<p>系統看護学講座 別巻 家族看護学 上別府 恵子他 (医学書院)</p>		
<p>参考書</p>			

専門分野 看護の統合と実践

科目名	単位数	開講期	
看護実践と医療安全	1 単位 30 時間	3 年次前期	
<p><目 的></p> <p>看護師は、医師の指示を受けて医療行為を行う機会が多い。数ある職業の中で、医療職ほどわずかな間違いで対象の傷害に直結する職業はない。そのため、看護師は、医療事故の当事者になる可能性が高く、医療システムの中に潜む危険因子を知り、臨床実践におけるさまざまな状況に対応できる看護実践力が必要となる。</p> <p>そこで、これまでに学んだ知識と技術を統合し、安全で安心できる倫理的な看護を提供するための思考・判断・行動の仕方について学ぶ。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 医療システムの中の危険要因を知り、事故防止のための基本的知識を理解する 2. 医療安全における看護の役割と看護師としての責任について理解する 3. 安全で安心な医療提供に必要な臨床判断の考え方を理解する 4. 医療現場の実践を知り、多重課題への対処方法について理解する 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 医療安全	14	<ol style="list-style-type: none"> 1. 医療安全の概念 2. 看護師の法的規定 3. 医療安全の取り組みと評価 4. 事故発生のメカニズム 5. リスクマネジメントのプロセス 6. 主な医療事故とその予防策 7. 演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 演習方法 事例紹介－個人ワーク－GW－発表－まとめ－事後レポート 2) 学習の視点 <ol style="list-style-type: none"> (1) 医療事故のインシデント報告の要因と対策 (インシデントレポートの分析と活用) (2) 危険予知トレーニング (KYT基礎4ラウンド法) 	辻 早 (実務経験教員)
2. 臨床看護の実践	15	<ol style="list-style-type: none"> 1. 演習 <ol style="list-style-type: none"> 1) 目的 「複数患者への援助の実際と看護技術評価」 2) 演習方法 <ol style="list-style-type: none"> (1) 事例紹介－ディスカッション－まとめ－事後レポート 3) 学習の視点 <ol style="list-style-type: none"> (1) 症状を呈する患者および日常生活援助を必要としている患者2名を事例設定する (2) グループで患者の状態・状況をアセスメントして安全・安楽の確保、 	佐藤 典加 (実務経験教員)

		<p>自立度に合わせた援助の実施、援助の効率化を考え計画する</p> <p>(3) 2名の患者への実施すべき援助の優先順位を踏まえ計画立案する</p> <p>(4) 自己の看護技術の到達状況を評価し、課題を明確にする</p> <p>4) 技術項目</p> <p>(1) ①～⑥の診療の補助技術と日常生活援助技術とを組み合わせる</p> <p>①経鼻胃チューブの挿入・確認</p> <p>②グリセリン浣腸、摘便</p> <p>③体位ドレナージと口腔内・鼻腔内・気管内吸引</p> <p>④酸素ポンベの操作</p> <p>⑤導尿、膀胱留置カテーテルの挿入</p> <p>⑥注射法（静脈注射、点滴管理）輸液ポンプの操作</p>	
<p>評価</p>	<p>「医療安全」筆記試験 1時間（50%） 「臨床看護の実践」演習（50%）を総合評価する</p>		
<p>教科書</p>	<p>・系統看護学講座 統合分野 看護の統合と実践（2）医療安全 川村治子（医学書院）</p>		
<p>参考書</p>			

専門分野 看護の統合と実践

科目名	単位数	開講期	
看護研究の実際	1 単位 15 時間	3 年次前期～後期	
<p><目 的> 『看護研究の基礎』で学習した看護研究に関する基礎知識をもとに、基本的な過程をたどりながら研究的な学習を進める。また研究計画書から発表までの一連の過程をとおして、看護とは何か、看護現象や援助のあり方、看護専門職としての役割について理解を深める。</p> <p><目 標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護研究の基本的なステップにもとづいて、研究計画を立案することができる 2. 看護研究計画書にもとづいて、研究活動を遂行することができる 3. 他者の意見を取り入れ、自己の考えを表現し、グループとして学びを高め合うことができる 4. 研究活動をとおして、看護に対する見方・考え方や看護専門職としての役割を洞察できる 			
単元	時間	学習内容・学習方法	担当講師
1. 看護研究の実際	14	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護現象から研究課題へ <ol style="list-style-type: none"> 1) 自己の研究課題の発見 2) 研究テーマの絞り込み ※臨地実習を振り返り、探求したい看護実践を見だし、研究の可能性を見極めて研究テーマを絞り込む。 2. 研究課題の選定 3. 研究計画書の作成 <ol style="list-style-type: none"> 1) 研究テーマの検討 2) 目的の明確化 3) 看護研究における倫理的配慮の指針を適応 4) 指定の構成要素・内容を満たした計画書作成 ※担当教員の指導・助言を受けながら進める。 4. 看護研究の実施 <ol style="list-style-type: none"> 1) 研究計画書にもとづき、その事実から論理を引き出す 2) 論文作成 	永 洞 文 子 (実務経験教員)
評 価	ケーススタディプロセスを総合評価する		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的看護論 薄 井 坦 子 (日本看護協会出版会) ・系統看護学講座 別巻 看護研究 坂下玲子他 (医学書院) 		
参考書			

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
基礎看護学実習 I	1 単位 30 時間	1 年次前期	中井 史世 (実務経験教員)
実習目的	対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えるために必要な、看護活動の場や看護師の役割・機能および療養生活を送る患者の生活環境について学ぶ。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護活動が行われる場を理解する（病院の機能・構造） 2. 患者の療養生活環境を知る 3. 患者を尊重した言葉使いや挨拶ができる 4. 患者の療養生活を支える看護活動を知る 5. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：4日間 2. 実習場所：病棟・学内 3. 実習内容・実習方法：見学・一部体験実習を行う <ol style="list-style-type: none"> 1) 病院見学・病院オリエンテーション 2) 看護活動の見学 3) 患者とのコミュニケーション 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の3分の2以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は100点満点とし、60点以上を合格、60点未満を不合格とする 		

専門分野 基礎看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
基礎看護学実習Ⅱ	2単位 90時間	1年次後期	中井 史世 (実務経験教員)
実習目的	対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えるために必要な「対象の全体像の描き方」「看護の方向性の考え方」「生活過程を整える看護」について、看護過程のプロセスの一部を展開して学ぶ。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象の全体像を描くことができる 2. 看護の方向性がイメージできる 3. 対象に関心を持ち関わることができる 4. 生活過程を整える看護技術を安全・安楽に実践できる 5. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：12日間 2. 実習場所：病棟・学内 3. 実習内容・実習方法：受け持ち患者を持ち、看護過程のプロセスの一部を展開する <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象の全体像を描き、看護の方向性をイメージするために、情報収集と看護活動を見学する 2) 全体像モデルを活用して対象の全体像を描き、看護の方向性をイメージする 3) 受け持ち患者に必要な日常生活の援助を実践する 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の3分の2以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は100点満点とし、60点以上を合格、60点未満を不合格とする 		

専門分野 地域・在宅看護論

科目名	単位数	開講期	単位認定者
地域・在宅看護論実習	2 単位 60 時間	3 年次前期～後期	山下 直美 (実務経験教員)
実習目的	地域・在宅看護の特性を理解し、地域で生活する対象とその家族を大づかみに捉え、看護の方向性から経過を予測し対象の状態に応じて、日々の看護を実践する能力を養う（臨床判断能力）。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> あらゆる健康の段階にある在宅で生活する対象とその家族を大づかみに理解する 在宅で生活する対象と家族に関心を持ち関わることができる 在宅で生活する対象と家族の生活を支援するために、対象の状態に応じて日々の看護を計画・実践・評価ができる 地域・在宅看護の特性を理解する 保健医療福祉チームの連携・協働の必要性から、看護師の役割を理解する 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 実習期間：8 日間 実習場所：保健所・地域包括支援センター・連携室・訪問看護ステーション・学内 実習内容・実習方法 <ol style="list-style-type: none"> 「保健所・地域包括支援センター」は、見学実習を行う 訪問看護ステーションは、利用者を受け持ち、臨床判断能力育成実習を行う <ol style="list-style-type: none"> 対象特性・看護の方向性を捉えるため、情報収集と看護活動を見学する 立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる 訪問看護ステーションの看護計画をもとに、その日の対象の状態に応じた日々の援助を計画・実践・評価する カンファレンスをする 連携室は、見学・一部体験実習を行う 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		

専門分野 成人看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
成人看護学実習 I	2 単位 90 時間	2 年次前期	中井 史世 (実務経験教員) 大島 慈代 (実務経験教員)
実習目的	健康障害をもつ成人期にある”対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整える”ために必要な「対象特性の理解」「看護の方向性の考え方」「生活過程を整える看護」について、看護過程のプロセスの一部を展開して学ぶ。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康障害をもつ対象の対象特性（全体像）を捉えることができる 2. 看護の方向性を挙げるができる 3. 対象に関心を持ち関わるができる 4. 生活過程を整える看護技術を安全・安楽に実践できる 5. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：12 日間 2. 実習場所：病棟・学内 3. 実習内容・実習方法：受け持ち患者を持ち、看護過程のプロセスの一部を展開する <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象特性・看護の方向性を捉えるために、情報収集と看護活動を見学する 2) 全体像モデル・立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる 3) 受け持ち患者に必要な日常生活の援助を実践する 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の3分の2以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は100点満点とし、60点以上を合格、60点未満を不合格とする 		

専門分野 成人看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
成人看護学実習Ⅱ	2 単位 90 時間	2 年次後期	浅野 智子 (実務経験教員)
実習目的	健康障害をもつ成人期にある対象とその家族を総合的に理解し、健康の段階に応じて、生命力の消耗を最小にするよう持てる力を働かせ、生活過程を整えることを看護過程を展開し学ぶ。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. あらゆる健康の段階にある健康障害をもつ成人期の対象とその家族を総合的に理解する 2. 対象と家族に関心を持ち人間関係を築くことができる 3. 対象が持てる力を発揮できるように看護計画の立案・実践・評価ができる 4. 保健医療福祉チームの連携・協働の必要性を理解する 5. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：12 日間 2. 実習場所：病棟・学内 3. 実習内容・実習方法：受け持ち患者を持ち、看護過程展開実習を行う <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象特性・看護の方向性を捉えるために、情報収集と看護活動を見学する 2) 全体像モデル・立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる 3) 日常生活の規制から必要な看護計画を立案する 4) 看護計画にもとづき、援助を実践する 5) 看護計画を実践結果にもとづき評価・修正する 6) カンファレンスをする 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		

専門分野 健康の段階別看護実習

科目名	単位数	開講期	単位認定者
健康の段階別看護実習 I (慢性期・終末期)	2 単位 90 時間	2 年次後期	永 洞 文 子 (実務経験教員)
実習目的	慢性期・終末期にある健康障害をもつ成人・老年期の対象とその家族を総合的に理解し、生命力の消耗を最小にするよう持てる力を働かせ、生活過程を整えることを看護過程を展開し学ぶ。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 慢性期・終末期にある健康障害をもつ成人・老年期の対象とその家族を総合的に理解する 対象と家族に関心を持ち人間関係を築くことができる 対象が持てる力を発揮できるように看護計画の立案・実践・評価ができる 保健医療福祉チームの連携・協働の必要性を理解する 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 実習期間：9 日間 実習場所：病棟・学内 実習内容・実習方法：受け持ち患者を持ち、看護過程展開実習を行う <ol style="list-style-type: none"> 対象特性・看護の方向性を捉えるために、情報収集と看護活動を見学する 全体像モデル・立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる 日常生活の規制から必要な看護計画を立案する 看護計画にもとづき、援助を実践する 看護計画を実践結果にもとづき評価・修正する カンファレンスをする 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		

専門分野 健康の段階別看護実習

科目名	単位数	開講期	単位認定者
健康の段階別看護実習Ⅱ (周手術期)	2単位 90時間	3年次前期	浅野 智子 (実務経験教員)
実習目的	周手術期にある成人・老年期の対象とその家族を大づかみに捉え、看護の方向性から経過を予測し対象の状態に応じて、日々の看護を実践する能力を養う（臨床判断能力）。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 周手術期にある成人・老年期の対象とその家族を総合的に理解する 2. 対象と家族に関心を持ち人間関係を築くことができる 3. 回復過程を支援するために、対象の状態に応じて日々の看護を計画・実践・評価ができる 4. 周手術期（術前・術中・術後）における看護の特性を理解する 5. 保健医療福祉チームの連携・協働の必要性から、看護師の役割を理解する 6. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：12日間 2. 実習場所：病棟・ICU・手術室 3. 実習内容・実習方法 <ol style="list-style-type: none"> 1) 手術室・ICU実習：見学・一部体験実習を行う 2) 病棟実習：受け持ち患者を持ち、臨床判断能力育成実習を行う <ol style="list-style-type: none"> (1) 対象特性・看護の方向性を捉えるため、情報収集と看護活動を見学する (2) 立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる (3) 病棟の看護計画（クリティカルパス）をもとに、対象特性・看護の方向性と結び付ける (4) 病棟の看護計画をもとに、その日の対象の状態に応じた日々の援助を計画・実践・評価する (5) カンファレンスをする 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の3分の2以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は100点満点とし、60点以上を合格、60点未満を不合格とする 		

専門分野 老年看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
老年看護学実習	2単位 60時間	3年次前期～後期	永洞 文子 (実務経験教員)
実習目的	老年看護の特性を理解し、地域で生活している老年期の対象とその家族を大づかみに捉え、看護の方向性から経過を予測し対象の状態に応じて、日々の看護を実践する能力を養う（臨床判断能力）。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 住み慣れた生活の場で、その人らしく生活している対象とその家族を総合的に理解する 2. 老年期の対象と家族に関心を持ち人間関係を築くことができる 3. 老年期の生活を支援するために、対象の状態に応じた日々の看護を計画・実践・評価ができる 4. 地域における老年看護の特性を理解する 5. 保健医療福祉チームの連携・協働の必要性から看護師の役割を理解する 6. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：8日間 2. 実習場所：介護老人保健施設「入所施設・通所施設」 3. 実習内容・実習方法 <ol style="list-style-type: none"> 1) 通所施設：見学・一部体験実習を行う 2) 入所施設：受け持ち利用者を持ち、臨床判断能力育成実習を行う <ol style="list-style-type: none"> (1) 対象特性・看護の方向性を捉えるため、情報収集と看護活動を見学する (2) 立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる (3) 病棟の看護計画をもとに、その日の対象の状態に応じた日々の援助を計画・実践・評価する (4) カンファレンスをする 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の3分の2以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は100点満点とし、60点以上を合格、60点未満を不合格とする 		

専門分野 小児看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
小児看護学実習 I	1 単位 30 時間	2 年次前期	佐藤 典加 (実務経験教員)
実習目的	乳幼児期の発達段階にある小児の理解と、健やかな小児の成長発達に必要な看護について学ぶ。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小児の成長発達過程を理解する 2. 健康な生活を送る小児の生活過程を理解する 3. 小児の健全な成長発達を支援する保育の実際を理解する 4. 保健医療福祉チーム・教育機関との連携・協働の必要性を理解する 5. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：4 日間 2. 実習場所：認定こども園・学内 3. 実習内容・実習方法：見学・一部体験実習を行う <ol style="list-style-type: none"> 1) オリエンテーションを受ける（実習 1 日目） 2) 日替わりで発達段階の違うクラス（年少・年中・年長）に入り、園児と保育（日常生活の支援・遊び）・教育（学習）に、指導を受けながら参加する 3) グループワークと全体会で『小児看護学実習 I』の学びを看護の視点で整理する 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		

専門分野 小児看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
小児看護学実習Ⅱ	1 単位 30 時間	3 年次前期～後期	佐藤 典加 (実務経験教員)
実習目的	小児看護の特性を理解し、あらゆる健康の段階にある患児とその家族を大づかみに捉え、看護の方向性から日々の看護を実践する能力を養う（臨床判断能力）。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. あらゆる健康の段階にある患児とその家族を大づかみに理解する 2. 患児と家族に関心を持ち関わることができる 3. 患児の回復過程を支援するために、対象の状態に応じて日々の看護を計画・実践・評価ができる 4. 小児看護の特性を理解する 5. 保健医療福祉チーム・教育機関との連携・協働の必要性から、看護師の役割を理解する 6. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：4 日間 2. 実習場所：外来・NICU・病棟 3. 実習内容・実習方法 <ol style="list-style-type: none"> 1) 外来・NICU 実習は、見学・一部体験実習を行う 2) 病棟実習は、受け持ち患児を持ち、臨床判断能力育成実習を行う <ol style="list-style-type: none"> (1) 対象特性・看護の方向性を捉えるため、情報収集と看護活動を見学する (2) 立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる (3) 看護計画をもとに、その日の対象の状態に応じた日々の援助を計画・実践・評価する (4) カンファレンスをする 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		

専門分野 母性看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
母性看護学実習	2 単位 60 時間	3 年次前期～後期	佐々木 梓 (実務経験教員)
実習目的	母性看護の特性を理解し、周産期にある母子とその家族が持てる力を働かせて、生活過程を整えるために必要な看護について学ぶ。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 周産期にある母子とその家族を大づかみに理解する 2. 周産期にある母子と家族に関心を持ち関わることができる 3. 周産期にある母子に必要な看護をその日の状態に応じて、計画・実践・評価ができる 4. 周産期における母性看護の特性を理解する 5. 保健医療福祉チームとの連携・協働の必要性から、看護師の役割を理解する 6. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：8 日間 2. 実習場所：外来・病棟「褥室・新生児室」・学内 3. 実習内容・実習方法 <ol style="list-style-type: none"> 1) 外来実習は、見学・一部体験実習を行う 2) 病棟実習は、受け持ち褥婦・新生児（親子セット）を持ち、臨床判断能力育成実習を行う (1) 対象特性・看護の方向性を捉えるため、情報収集と看護活動を見学する (2) 立体像モデルを描き、対象特性と看護の方向性をあげる (3) 病棟の看護計画（クリパス）をもとに、その日の対象（褥婦・新生児）の状態に応じた日々の援助を計画・実践・評価する (4) カンファレンスをする 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		

専門分野 精神看護学

科目名	単位数	開講期	単位認定者
精神看護学実習	2 単位 90 時間	3 年次前期～後期	辻 早 (実務経験教員)
実習目的	精神に障害をもつ対象とその家族の状況を知り、精神症状や精神状態によって影響された生活過程を整えるための看護の役割を学ぶ。また、対象との関りを通して自己を見つめ、人間関係を成立・発展させるための能力を養う。		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 精神に健康障害をもつ対象の特性を捉え、必要な看護を理解する 2. 対象との関わりをとおして自己を見つめ、「患者-看護師関係」のあり方を理解し、人間関係を築く能力を身につける 3. 精神障害をもつ対象の看護活動に参加し、日常生活を整える看護を理解する 4. 精神医療における看護の役割を理解する 5. 保健医療福祉チームの一員として、看護師および多職種との連携・協働の必要性を理解する 6. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：9 日間 2. 実習場所：病棟・デイケアセンター・学内 3. 実習内容・実習方法 <ol style="list-style-type: none"> 1) 病棟実習 <ol style="list-style-type: none"> (1) 対象特性・看護の方向性を捉えるため、情報収集・看護活動の見学・実施をする (2) 全体像モデル・立体像モデルを描き対象特性・看護の方向性をあげる (3) 対象との関りをプロセスレコード（再構成）にとり、対象の認識や言動の意味、自己の傾向を分析・考察する (4) 薬物療法、作業療法、レクレーション療法などに参加する (5) 病棟のカンファレンスや多職種との連携・協働場面を見学する (6) カンファレンスをする 2) デイケア実習 <ol style="list-style-type: none"> (1) 活動に参加し、利用者はどんな社会資源を活用して地域で生活しているのか、関わりをとおして知る 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		

専門分野 看護の統合と実践実習

科目名	単位数	開講期	単位認定者
看護の統合と実践実習	2 単位 90 時間	3 年次後期	本 間 かほり (実務経験教員)
実習目的	<p>看護を組織でよりよく行うための看護管理の実際について知り、看護チームの一員として責任と役割を学び、看護師としての認識を高める。さらに、複数の対象に必要な看護を行うための思考・判断・行動について理解を深めるとともに、よりよい看護実践となるよう臨床判断について学ぶ。また、看護専門職としての自覚を持ち、自己課題を明確にし、自己研鑽する能力を養う。</p>		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 病院で行われている看護管理の実際について理解する 2. 看護管理の目的をもとに、看護チームの責任と役割を実際から理解する 3. 対象の 24 時間の療養生活に合わせた看護活動の実際について理解する 4. 複数の受け持ち対象を総合的に理解する 5. 複数の受け持ち対象に関心を持ち人間関係を築くことができる 6. 複数の受け持ち対象の日々の状態・状況に応じた必要な看護を安全で倫理的に看護を実践できる 7. 看護チームの一員として責任と自覚をもち、メンバーシップを意識した行動がとれる 8. 卒後の臨床看護実践をイメージして、看護専門職としての自己課題を明確にする 9. 看護を学ぶ社会人として倫理的な行動がとれる 		
実習内容 実習方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習期間：9 日間 2. 実習場所：病棟・学内 3. 実習内容・実習方法 <ol style="list-style-type: none"> 1) 病棟管理者に同行し看護管理の実際を見学する 2) チームリーダー・メンバーに同行し、業務の実際を見学・体験する（午前・午後に役割体験を分ける） 3) 夜勤帯業務を見学・体験する 4) 複数の対象を受け持ち日々の状態・状況に応じた必要な看護を、優先度を判断して実践する（受け持ち患者選定 2 名：発達段階や健康の段階を限定しない） 5) カンファレンスをする 		
実習評価	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業科目の所定時間数の 3 分の 2 以上出席した者に対し、実習評価を受けることができる 2. 実習評価は 100 点満点とし、60 点以上を合格、60 点未満を不合格とする 		